

石川県埋蔵文化財情報

第 5 号

序「1年を振り返って」……………専務理事 武田寿夫

巻頭カラー写真 一針B遺跡

平成12(2000)年度上半期の発掘調査……………調査部長 小嶋芳孝…(1)

発掘調査略報

柏原ミツハシ遺跡・柏原ジッチン遺跡……………	(4)
鵜島遺跡……………	(6)
鹿波しやく川遺跡……………	(8)
徳丸遺跡……………	(9)
吉田C遺跡……………	(12)
坪川遺跡……………	(14)
四柳白山下遺跡(第7次調査)……………	(16)
萩島遺跡……………	(20)
金沢城跡……………	(22)
豊穂遺跡(第2次調査)……………	(26)
橋爪B遺跡……………	(28)
一針B・C遺跡……………	(30)
直下遺跡……………	(34)

平成12(2000)年度上半期の遺物整理作業……………企画部整理課…(36)

調査・研究報告

羽咋市四柳白山下遺跡出土の古代銭貨……………加藤克郎…(38)

2001年3月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

序 1 年 を 振 り 返 っ て



専務理事 たけだ ひさお 武田寿夫

昨年4月、県土木部からの異動で当センターの専務理事となって早や1年が経ちました。

県の主要プロジェクトを積極的に展開、推進する部署から文化財の発掘保存に力を入れるという攻守所を代えた立場となり、まず、心機一転頭の切り換えを行うことから始めました。

専務理事としてやるべきことはなにか。

種々ありますが特に2つのことが頭に浮かびました。

- (1) 財団組織全体がうまく活動・機能し職員が持てる能力を十分発揮できるための目配り、気配り、環境づくり。
- (2) 当センターが県民から一層愛され親しまれ、身近かなものとなるための工夫、努力。

百聞は一見にしかず。5月に入り、発掘調査が本格化しだした頃、調査部長と共に初めて発掘現場に足を運びました。

そこで目の当たりにしたのは、調査員の迅速・的確な指示のもとに黙々と発掘作業に専念する作業員と少しずつ姿を見せはじめた歴史の重みを感じさせる土器、遺構などでした。その出土品がどのようなメッセージを持って、現代の私たちに届けてくれるのか解明が待たれました。

8月頃から、発掘調査の成果が徐々にまとまり、次々と記者発表することとなりました。

なんといっても津幡町加茂遺跡から出土した全国初の平安のお触書「加賀郡勝示札」は当時の律令政治や農民生活の実態の一部を明らかにする超一級の歴史資料の大発見ということでセンター内が興奮に包まれました。同じ場所から出土した過所木簡（パスポート）や幅6メートルの官道（北陸道）により、津幡町加茂が交通の要衝であったことも判明したのです。

そのほか小松市の一針遺跡では、弥生時代の土製鋳型が出土し、約1900年前に既に青銅器製造の技術を持っていたとは驚きでした。また、金沢市畝田ナベタ遺跡では、平安時代の物流センター基地であったと推察できる建物群遺構や大型井戸を発見し、山中町九谷A遺跡の江戸時代の古九谷絵付窯跡の可能性が強い焼土遺構群、金沢城跡のいもり堀からは土橋遺構、金箔瓦などを出土し、近年希にみる発掘調査の当たり年であったことは、奮闘した調査員はもとより私にとっても嬉しい限りです。

このように、各地の遺跡から次々と本県の豊かな歴史の一端が解明され、改めて先人たちが厳しい自然環境の中で苦勞をし、知恵を出し、長年に亘って築いた貴重な埋蔵文化財を地域の発展につなげ、後世に伝えることの大切さを認識し、今後一層発掘調査、保存に努めたいと思った次第です。

言うまでもないことですが、発掘調査には税金が充てられていることを私たち埋文関係者は常に念頭に置き、国民、県民の理解と協力、そして信頼が得られるよう留意しなければなりません。

今まで、土木部と埋蔵文化財センターは相反する立場のものと思っていたのですが、開発行為と発掘調査行為は国民、県民にとって共に有益なものという点では一致する密接不離の関係にあることを認識し、開発部署との連携を一層密にして優れた発掘調査成果が上げられるよう努めたいと思っております。

今年度は県内重大ニュースの上位にランクされた加賀郡勝示札の発見をはじめ数多くの発掘調査の成果がマスメディアによって大きく報道されたことから、当センターを訪れた方々は、2月末現在、対前年比31%と大幅に増え、県民とセンターの距離が縮まったと思っております。

今年春には、センター敷地内に古代体験ひろばがオープンする予定となっており、現在、縄文、弥生、古代の復元住居が県内の調査結果を踏まえ完成しました。多くの県民にお越し頂き、喧騒の現代社会から一時離れ、ロマンあふれる古代の人々の衣、食、住に触れて頂きたいと願っております。



写真1 竪穴式建物跡 SI01(南西より)



写真2 SI01出土の鑄造関係遺物

(写真の解説)

写真1 一針B遺跡 竪穴式建物 SI01 (南西より)

竪穴中央部には楕円形の灰穴炉と、その長軸側両端部に柱穴状の小ピットが構築されている。

写真2 SI01出土の鑄造関係遺物

左：割竹型の土製鑄型 中：箱型の土製鑄型

右上：とりべとみられる鉢形土器

右下：内面に斜格子が刻まれた鑄型

平成12(2000)年度上半期の発掘調査

調査部長 小嶋芳孝

平成12(2000)年度は、県教委から30遺跡の調査を受託した。当初の調査面積総計は、84,940㎡である。内訳は、建設省(国土交通省)事業に伴う調査が7件、県農林水産部関係が13件、県土木部関係が10件である。

本書では4～8月の調査を主に紹介する。この期間で最も大きな成果は、加茂遺跡で加賀郡勝示札が出土したことである。加茂遺跡の調査は、国道8号線津幡北バイパスの工事に伴って実施している。今年度調査の詳細は次号に紹介する予定だが、6月8日に大溝から加賀郡勝示札が出土してから、連夜、解説作業をつづけ、平川南(国立歴史民俗博物館教授)先生のご指導を得て9月7日に記者発表をすることができた。この木簡の内容だけでなく、加茂遺跡を南北に通る道路遺構をはじめ遺跡の性格付けなどについて、さまざまな議論が巻き起こっている。出土資料から歴史を読み解く醍醐味を味わう、得難い経験をすることができた。出土地点の保存や遺跡の全体像の把握など、加茂遺跡を後世に伝えるための作業が開始され、また加賀郡勝示札自体の研究が始まっている。

一針B遺跡(小松市)では、弥生時代後期の竪穴建物から鋳型外枠の破片を検出している。北陸の弥生時代青銅器生産は、下屋敷遺跡(福井県三国町)の石製銅鐸鋳型、大友西遺跡(金沢市)で出土した連鋳状態の銅鏃、吉崎次場遺跡(羽咋市)の銅鐸鋳型などが、これまでに出土している。しかし、いずれも出土状況や資料解釈・年代決定などで問題を抱えており、北陸の弥生社会で青銅器生産がおこなわれていたことを断定することができなかった。今回の一針B遺跡出土の調査では、鋳型外枠の出土状態が明瞭で、炉材と思われる焼土塊も出土しているなど、これまでで最も良好な状態で青銅器生産を立証する資料を検出した。また、この遺跡からは古墳時代初頭の溝から輪羽口が出土しており、青銅器生産と共に鉄器制作も古墳時代初頭には行われていたことが判明している。

柏原ミツハシ遺跡(珠洲市)では、弥生時代末・古墳時代後期・奈良時代の建物遺構を検出している。このうち、弥生末の竪穴建物は深さ60cmあった。覆土に多量の地山質土を含んでいることから、周堤ないし土屋根の用土が堆積している可能性が高い。また、埋土から古墳時代中期の土器が出土していることから、竪穴の埋没時間のわかる興味深い例となっている。

吉田C遺跡(田鶴浜町)も県営ほ場整備事業に伴う調査で、8～9世紀後半の土層から「厨」と墨書された土器や三点の木簡など、能登の古代史を考える上で重要な資料が出土している。

徳丸遺跡(鹿西町)は、鹿西町から志賀町に抜ける県道の拡幅工事にともない調査を実施した。鹿西町や鹿島町など邑知地溝帯の遺跡は背後の山から流出した土砂に厚く覆われていることが多く、徳丸遺跡も河川堆積や氾濫堆積を幾層も挟んで中世・古代・弥生・縄文の包含層を検出した。

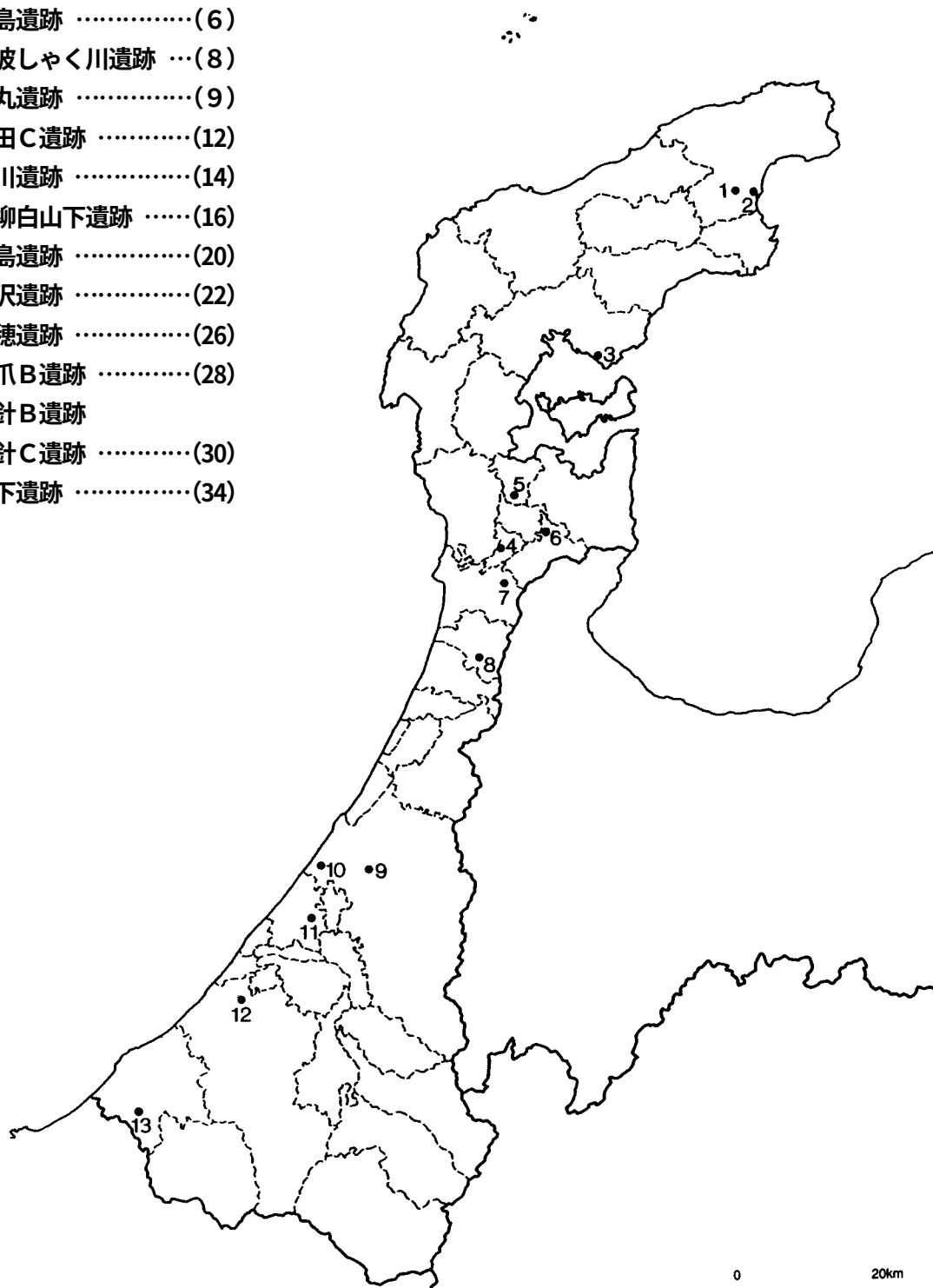
金沢城跡では、いもり堀・橋爪門枳形地点、北ノ丸などで調査を実施している。いずれも小規模な調査であるが、16世紀末から17世紀初頭の金沢御堂や築城初期の遺構を断片的ながら検出している。とくに北ノ丸にある簾右衛門丸で検出した茶毘閣連遺構は、金沢御堂との関連が窺われる興味深い遺構である。

調査課	事業者	担当課	事業名	場 所	遺跡名	面積 (㎡)	
調査一課	建設省 (国土交通省)	金沢工事 事務所	金沢東部環状道路	金沢市	観法寺古墳群	4,000	
			小松B P	小松市	千代・能美遺跡	7,000	
			小松B P	小松市	浄水寺跡	700	
			津幡北B P	津幡町	加茂遺跡	7,500	
			鹿島B P	羽咋市	四柳白山下遺跡	5,000	
			鹿島B P	羽咋市	大町ゴンジョガリ遺跡	4,000	
			鹿島B P	羽咋市	大町ダイジングウ遺跡	2,000	
	調査一課合計						30,200
調査二課	農林水産部	農地整備課	県営ほ場整備	珠洲市	柏原ミツハシ遺跡他	1,000	
				珠洲市	栗津カンジャバタケ遺跡	650	
				珠洲市	鶴島遺跡	1,000	
				中島町	山岸古墳群	550	
				志賀町	館御堂遺跡	300	
				田鶴浜町	吉田C遺跡	300	
				鹿島町	坪川遺跡	300	
				志雄町	萩島遺跡	580	
				志雄町	萩島B遺跡	180	
				松任市	橋爪B遺跡	600	
				小松市	一針B遺跡他	2,150	
				小松市	矢田野遺跡他	1,250	
				加賀市	柴山出村遺跡他	500	
				加賀市	片山津玉造遺跡	400	
	(農林小計)						9,760
	土木部	公園緑地課	金沢城址整備	金沢市	金沢城跡	7,500	
調査二課合計						17,260	
調査三課	土木部	道路建設課	能登穴水線	穴水町	鹿波しゃく川遺跡	200	
			志賀鹿西線	鹿西町	徳丸遺跡	485	
			主要地方道	小松市	那谷遺跡	500	
			南加賀ルート	加賀市	直下遺跡	1,600	
		道路整備課	主要地方道	鹿西町	宮地遺跡	280	
			河川課	広域基幹安原川	金沢市	豊穂遺跡	800
		九谷ダム		山中町	九谷A遺跡	4,000	
		都市計画課		鈴見新庄線	金沢市	額谷遺跡	1,500
		調査三課合計					
	調査四課	土木部	都市計画課	金沢西部第2土地 区画整理	金沢市	畝田・寺中遺跡	9,400
					畝田B遺跡	4,500	
					畝田C遺跡	2,100	
					畝田ナベタ遺跡他	6,500	
調査四課合計						22,500	
総合計						79,325	

(財) 石川県埋蔵文化財センターの平成12年度発掘調査計画 (8月現在)

[発掘調査略報]

- 1 柏原ミツハシ遺跡
柏原ジツチン遺跡 …(4)
- 2 鶴島遺跡 ……………(6)
- 3 鹿波しゃく川遺跡 …(8)
- 4 徳丸遺跡 ……………(9)
- 5 吉田C遺跡 ……………(12)
- 6 坪川遺跡 ……………(14)
- 7 四柳白山下遺跡 ……(16)
- 8 萩島遺跡 ……………(20)
- 9 金沢遺跡 ……………(22)
- 10 豊穂遺跡 ……………(26)
- 11 橋爪B遺跡 ……………(28)
- 12 一針B遺跡
一針C遺跡 ……………(30)
- 13 直下遺跡 ……………(34)



「発掘調査略報」掲載遺跡位置図 (S=1/800,000)

かしはら かしはら
柏原ミツハシ遺跡・柏原ジッチン遺跡

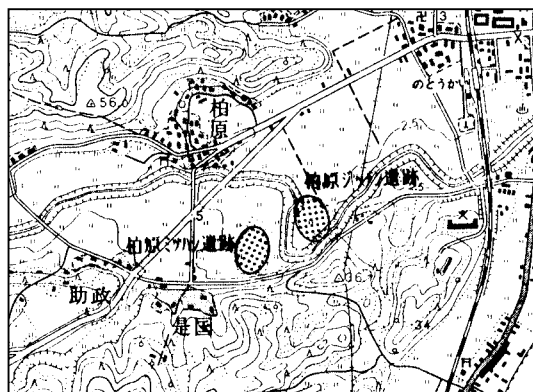
所在地 珠洲市宝立町柏原地内

調査期間 平成12年5月9日～平成12年8月1日

調査面積 1. 柏原ミツハシ遺跡 940㎡

調査担当 岩瀬由美 西田昌弘

2. 柏原ジッチン遺跡 240㎡



遺跡位置図 (S=1/25,000)

柏原ミツハシ遺跡、柏原ジッチン遺跡は珠洲市南部を東西に流れる鵜飼川のそれぞれ右岸と左岸に立地する。両遺跡とも弥生時代から中世の複合遺跡であり、今でこそ鵜飼川によって分かたれているが、直線距離にして100m足らずの位置関係から、密接な関係を持って営まれていたものと推定される。共に県営ほ場整備事業にかかる調査である。

1. 柏原ミツハシ遺跡

本遺跡からは弥生時代終末期～古墳時代後期の竪穴住居跡3棟、奈良時代の掘立柱建物跡1棟、中世初頭の井戸状土坑などを検出した。

調査区は北半部が高い平坦面を形成し、南半部は一段下がっている。一段落ちた辺りの遺構密度が周囲よりも低いことなどから、本来は漸移的に南側へ傾斜する地形であったものを人為的にカットした結果の段とみられる。その段に沿って中世の溝が走っており、その行為が中世段階のものである可能性は高い。また、調査区北西部には北東－南西方向に走る溝を検出した。試掘の結果、幅が26m以上に及ぶことが判明したため、その規模から推定すると鵜飼川の旧流路とみられる。

SI1は調査区の南端で検出した竪穴住居跡で、半分が調査区外であったが、確認調査の結果およそ8×7.1mの隅丸方形を呈することが判明した。検出面から床面までの深さは約60cmを測り、壁際に沿って厚い地山質土の堆積が観察され、周堤などが意図的に崩された可能性も考えられる。中央部付近はレンズ堆積となっており、上層から下層にかけて古墳時代中期の遺物が出土した。そのため当初は本住居跡を古墳時代の遺構と認識していたが、床面を調査した段階で弥生時代終末期の遺構であることが判明した。このことから廃棄されてから完全に埋まるまで200年前後を要したことが分かる。床面ではピット数基と壁溝を検出した。ピットのうち1基は柱穴と推定されるもので、内部には自然石と皮袋形土器が埋納されていた。また、壁溝からは壺、器台、皮袋形土器などが並べられた状態で出土しており、柱穴出土の遺物と合わせ、住居廃絶時の祭祀に関わる遺物と判断された。

SI2は4.5×3.5mの長方形を呈する竪穴住居跡であるが、床面までが約10cmと浅く、上部を削平されたものとみられる。覆土からは炭化した板材が数点出土しており、焼失家屋と推定された。北東コーナー床面では焼土面が検出され、周辺から土師器甕片が出土したことからカマド跡と判断された。本住居跡の年代は出土遺物から古墳時代後期に比定される。

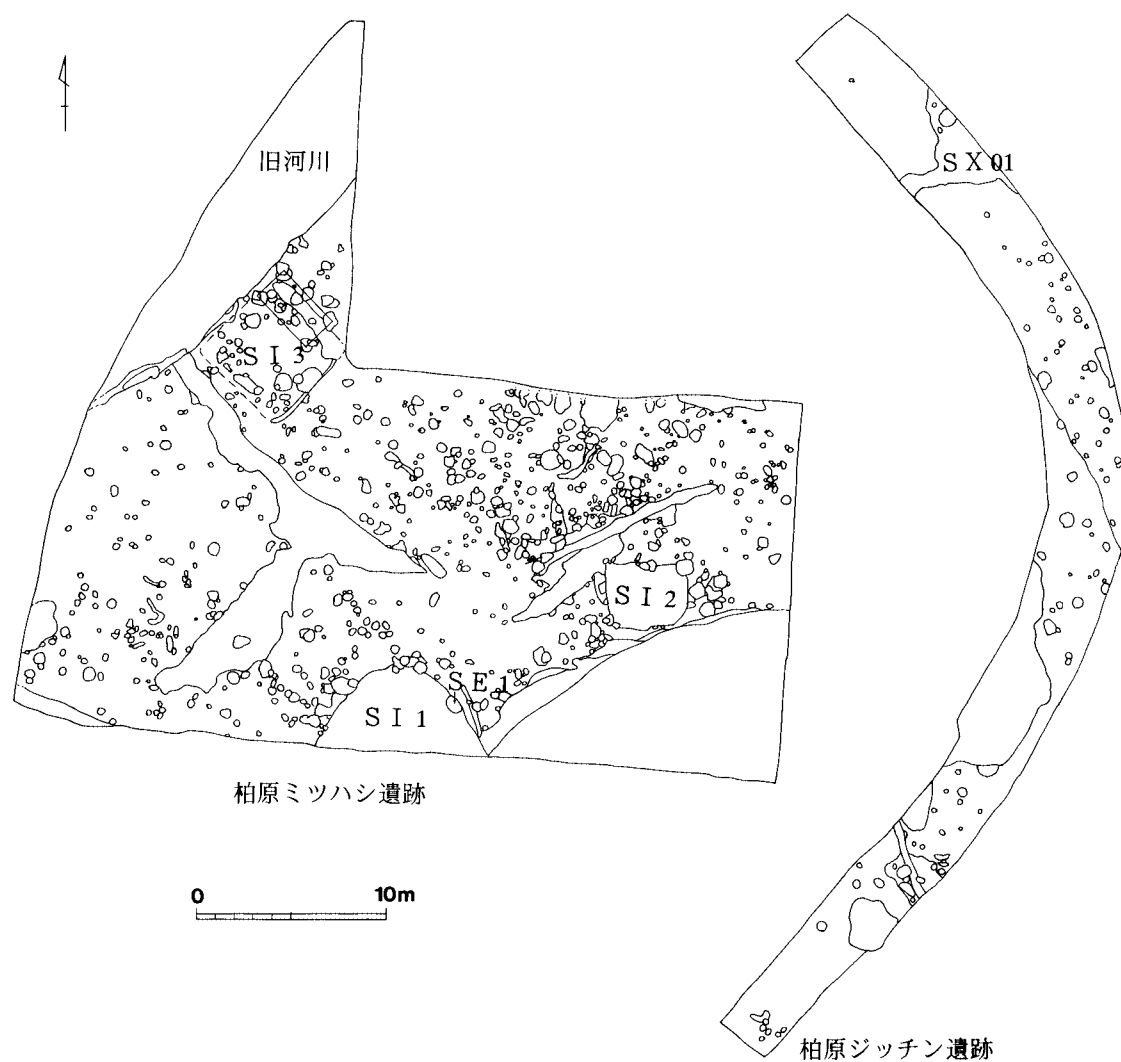
中世初頭の井戸状土坑 (SE1) からは漆器皿、箸状木製品、石製人形、トチの実、クルミなどが出土しているが、同時期の建物跡等はみつからない。

2. 柏原ジッチン遺跡

本遺跡の調査区は鵜飼川の護岸際であったため、護岸工事の際に大きくかく乱を受けていたが、北半部を中心に中世の掘立柱建物跡や井戸状土坑などが検出された。

井戸状土坑 (SX01) は人頭大の礫が散乱した状態で、それらを取り除いたところ、円形の土坑が

検出され、一部に石を組んだ痕跡が認められた。大半が調査区外であったため定かではないが、石組みの井戸が破壊を受けたものと判断された。時期は最終形態の珠洲焼鉢が出土していることから15世紀末葉以降に位置付けたい。
(岩瀬)



遺構略図 (S=1/400)



SI1 壁溝土器出土状況



SI1 器台出土状況

うしま
鵜島遺跡

所在地 珠洲市宝立町鵜島地内

調査期間 平成12年7月3日～平成12年9月29日

調査面積 約1,350㎡

調査担当 土屋宣雄 大西顕 加藤克郎 立原秀明

A区

古代の遺構では、棒状脚尖底タイプの製塩土器が集中する浅い落ち込み（SS）数十箇所と製塩炉跡と考えられる土坑（下層SK11）を検出した。中世の遺構では、底部を打ち欠いた珠洲焼の甕が横倒しの状態で出土した土坑（SK1）を検出した。井戸跡または墓跡と思われる。（立原）

B区

B1～2区では中世の掘立柱建物の柱穴を検出した。B13～15区にかけては幅約24mの鞍部を確認したが、殆ど遺物が出土していないのでその埋没した時期などは判明していない。B25～29区にかけては比較的多く製塩土器が出土した。それらの中には棒状脚尖底土器だけでなく、平底土器も出土していることからA区よりその操業時期は降るものと考えられる。また製塩土器の出土状況から、B区の遺跡の中心地は調査区の西側であると考えられる。（加藤）

C・D区

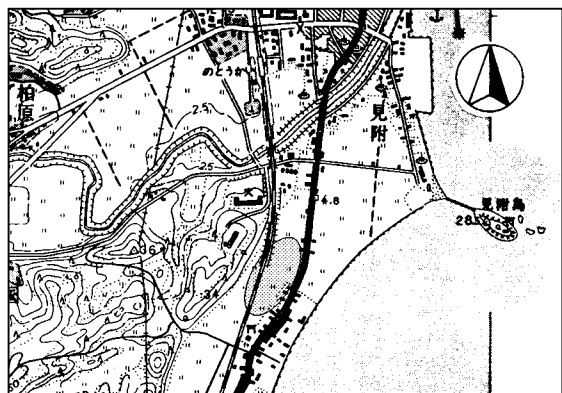
製塩土器が集中する浅い落ち込みないし土坑・溝状遺構を6基以上確認した。規模は2～7m程度で、楕円形・不正円形・溝状を呈するもので、深さは極浅い凹みから深いもので0.6m程度を測る。明確な炉跡は認識できなかったが、一部において製塩土器に混じり焼小石や赤褐色ないし白色に焼けた珪藻土塊が出土しており、これらの集在地点辺りが炉跡の可能性も考えられる。また、確実な炉跡を検出できなかった要因としては、当初からの掘り込みが比較的浅いものであったためか、あるいは基盤層が砂層のため崩壊を生じやすいこと等が考えられる。被熱珪藻土は、押し潰された状況での出土のため形状及び使用形態は掴みきれないが、県内の出土事例としては、能登島町無関カキノウラ遺跡が認められる。この遺跡においては本遺跡より残存状況が良かったことから、ブロック状のものをある程度の高さの炉壁に使用したのではないかと想定されている。但し、本遺跡の基盤層は砂層であるため、加熱により下方の水分が上昇して煮沸効率が低下することから、それを遮る目的として使用された可能性も考えられる。いずれにしろ、能登でも珪藻土の分布する地域のみの特徴といえる。

また、古代～中世に至る多数の柱穴が検出されており、中には柱根・礎板を伴うものもある。掘立柱建物の規模は確実には捉えられなかったが、柱間2、3間のものを数棟確認している。

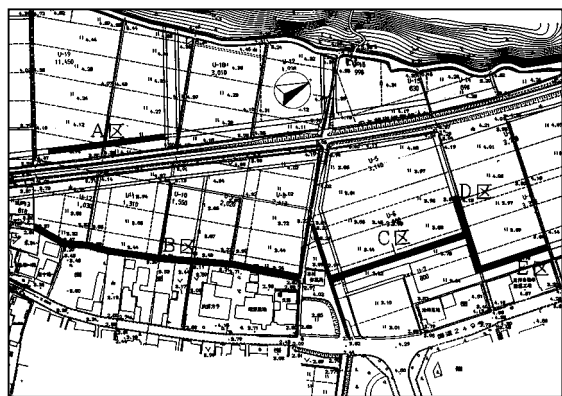
この他に中世では、溝や井戸等を検出している。C区SD1は覆土上部より多数の石が出土しており、墓に関係する遺構の可能性もある。同様にC区SD2は調査区内でくの字に屈曲する溝で、墓あるいは区画溝であろうか。覆土内からは元祐通寶1枚が出土している。この銭貨出土地点に近接したP77からは6枚の北宋銭が出土している。内訳は熙寧元寶1枚、紹聖元寶1枚、元豐通寶2枚、元符通寶1枚、皇宋通寶1枚である。六道銭の事例として注目される。また、井戸は井戸枠が遺存したものを2基検出している。C区SK6は径約2mの円形の平面プランで、検出面からの深さは約0.5mを測り、南東隅に珠洲焼甕を2つ組み合わせた井戸枠が遺存していた。甕は口径60cm程度のもので、口縁部を下にし、その中に底を打ち欠いた方を底にした甕を入れ込んだ形態をとる。D区SK2は、縦板組隅柱横棧止めの井戸枠をもつ。枠は一辺約70cm、深さ1.2m。周囲を3重の縦板及び砂利で囲み、砂の流入を防いでいる。珠洲焼・土師器皿・多くの箸状木製品が出土している。（土屋・大西）

E区

中世の区画溝や、大型の土坑2基を検出した。このうちSK2は覆土に多量の製塩土器が含まれていた。遺跡の北端調査区であるが、柱穴も存在し集落が営まれていたものと推定される。（大西）



遺跡位置図 (S=1/25,000)



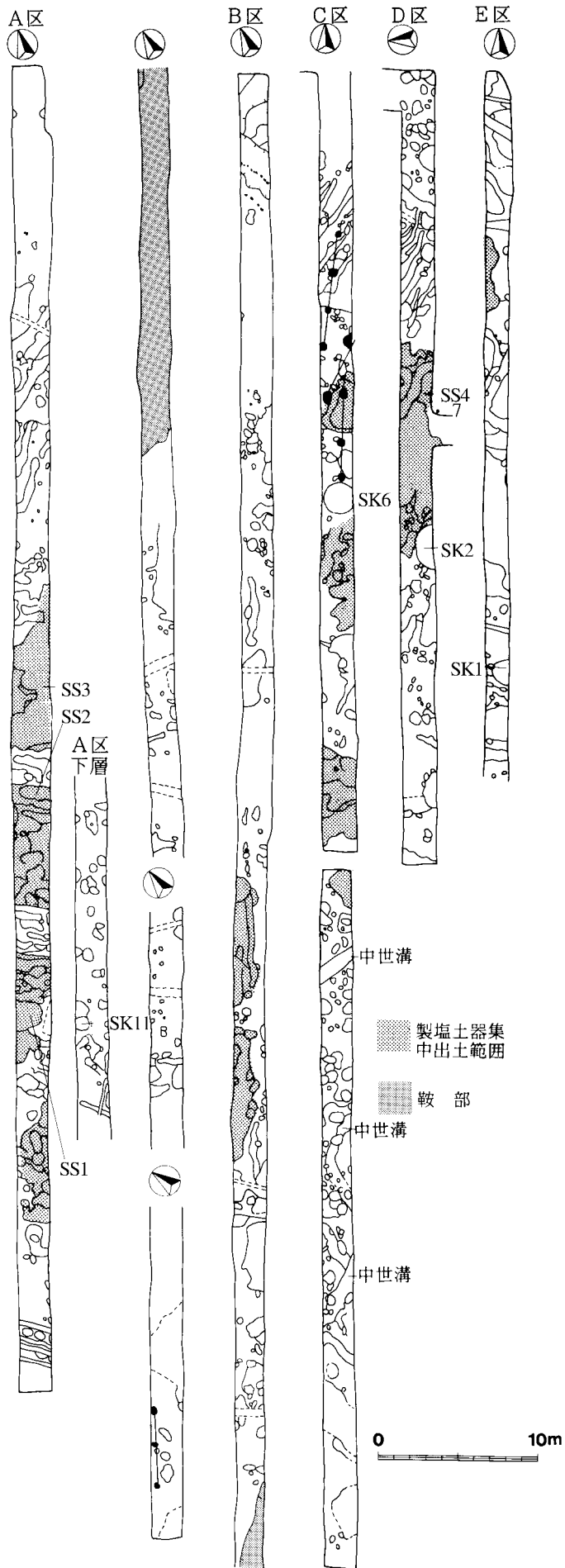
調査区位置図 (S=1/5,000)



C区 SD1



C区 SK6



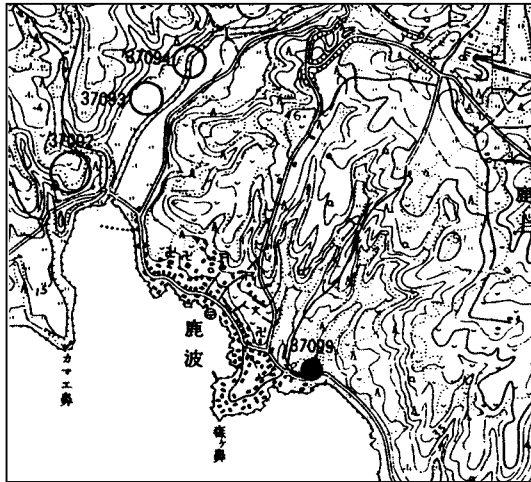
鹿波しやく川遺跡

所在地 鳳至郡穴水町鹿波地内

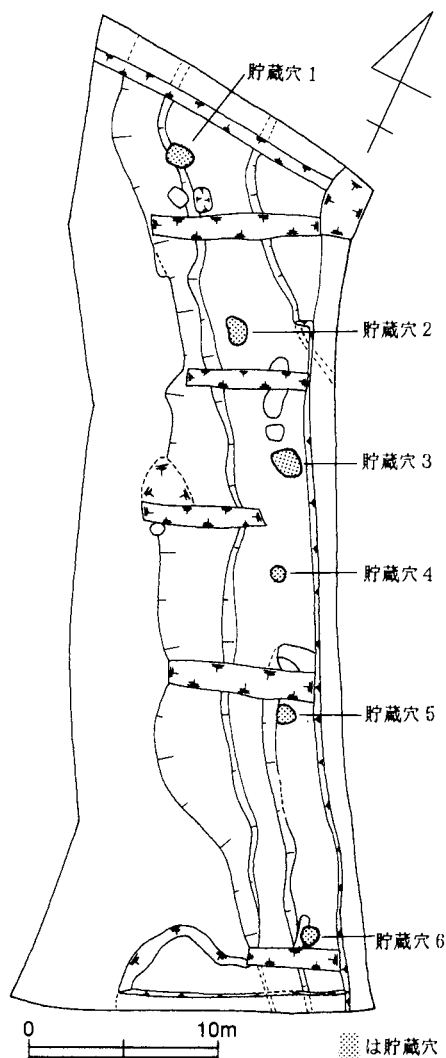
調査期間 平成12年6月19日～平成12年8月3日

調査面積 200m²

調査担当 安中哲徳 三谷正輝



遺跡位置図 (S=1/25,000)



下層調査区全体図 (S=1/400)

鹿波しやく川遺跡は、七尾北湾に南方向に開口した谷地の開口部付近に存在し、現在の海岸線から70m程中に入った谷地西側の丘陵先端部裾に今回の調査区は位置している。当初古代の製塩遺跡の存在が想定され調査を行ったが、古代の須恵器、土師器、製塩土器片がわずかに出土したもののすべて流れ込みによるもので、製塩遺構は確認できていない。

調査区は上層と下層の2面からなり、下層面からは弥生時代後期後半～終末期に属する多量の土器片や磨製石斧などの石器を出土している小河川跡がみついている。河川の落ち込み部近くの底からは、6基の袋状を呈する貯蔵穴が約5mの距離をおいて検出され、貯蔵穴底の砂層中からはトチやドングリ等の種実類が出土している。貯蔵穴の横には杭が打たれているものがあり、河川の肩から板を渡し種実類の水さらし、アク抜き等の作業を行っていたと考えている。調査区内には建物跡が検出されておらず、居住域は丘陵上の平坦面に存在していたと想定している。

河川埋没後は拳大の礫と粘土を用いて丘陵裾部の整地を行っており、上層面には弥生時代終末期から古墳時代初頭に属する土器が出土する土坑や杭列が確認されている。上層の遺構面は近年の耕地整理により攪乱を受けている部分が多く、これらの土坑が建物等になるかどうかは不明である。

また、河川跡のベースとなる粘砂質土中からは、縄文土器や石錘が出土しており、付近には縄文時代の遺跡が存在するものと考えられる。(安中)



貯蔵穴2 トチ検出状況

徳丸遺跡

所在地 鹿島郡鹿西町徳丸地内

調査期間 平成12年4月17～平成12年6月12日

調査面積 230㎡（累積485㎡）

調査担当 安中哲徳 三谷正輝 加藤祐介



遺跡位置図（S=1/25,000）

徳丸遺跡は、能登半島の基部を横断する邑知地溝帯北側に連なる眉丈山系を水源とする、橋本川左岸の丘陵裾に存在している。

ふるさと支援道路整備事業一般県道志賀鹿西線工事に伴う発掘調査で、今年度の調査は昨年度に続く第2次調査にあたる。

昨年度の調査では、弥生時代から近世にかけての遺構面が複数存在することがわかっており、中・近世の井戸跡、古代の掘立柱建物柱穴の可能性のある土坑、弥生時代中期・後期・終末期、古墳時代初頭の各時期の掘立柱建物跡、竪穴建物跡、溝、大型土坑などのほか、縄文時代から近世にかけての多数の河川跡が幾層にも複雑に重なってみつまっている。（A～D区）

今年度の調査区は昨年度の調査区の北側に位置し（E区）、中世の完形の土師器皿を多く出土している橋本川の旧流路を初め、昨年度と同様に遺構面が複数存在することが確認されている。弥生時代後期後半～古墳時代初頭の竪穴建物跡や掘立柱建物跡の柱穴、土坑、溝や土器棺墓等が検出され、さらに下層からは縄文時代後・晩期の包含層及び中期の包含層や石囲炉をもつ竪穴建物跡、埋甕などの土坑が検出されている。以下、これらの内容を詳述していく。

表土直下では、調査区中央から北西側にかけて橋本川の旧流路を検出している。河川堆積である最深部での深さ約2mを測る黄褐色粗砂層を除去すると、左岸の東側斜面上部から川底にかけて、中世の完形の土師器皿がまとまって出土している。土師器皿は14世紀前半頃のもので、斜面上部からまとめて投げ棄てられたか、もしくは土坑などに一括して納められていたものが河川の浸食により流出したものと考えられ、どちらにしても祭祀的な意味合いが強いものであると考えている。他にも河川の底近くからは、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼などが出土している。

河川堆積を除去後は、旧流路に削られ残った部分の調査を行っている。南側では、古墳時代後期以降の包含層や、古墳時代初頭の遺構面（Ⅰ面）と弥生時代終末期の遺構面（Ⅱ面）を確認している。



E区北側Ⅲ面 完掘状況（南から）



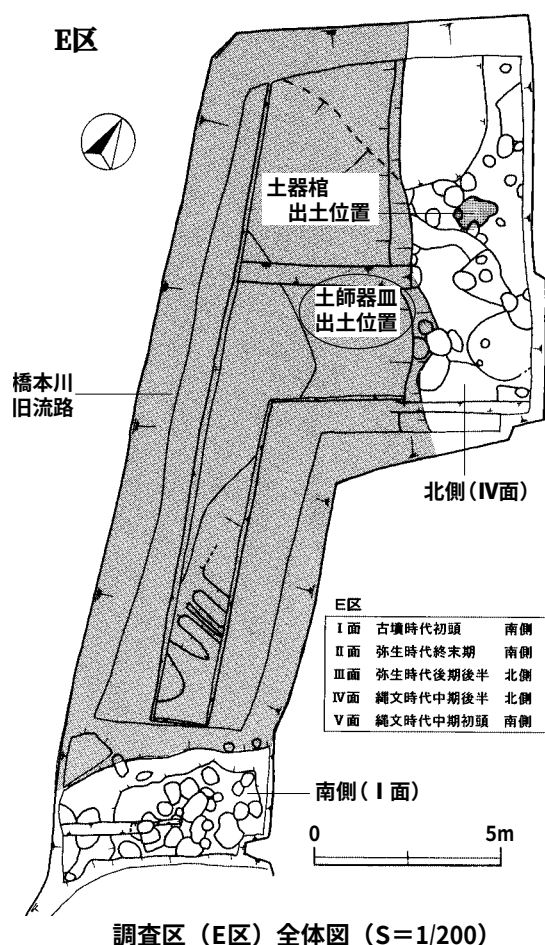
E区北側Ⅳ面 完掘状況（北から）

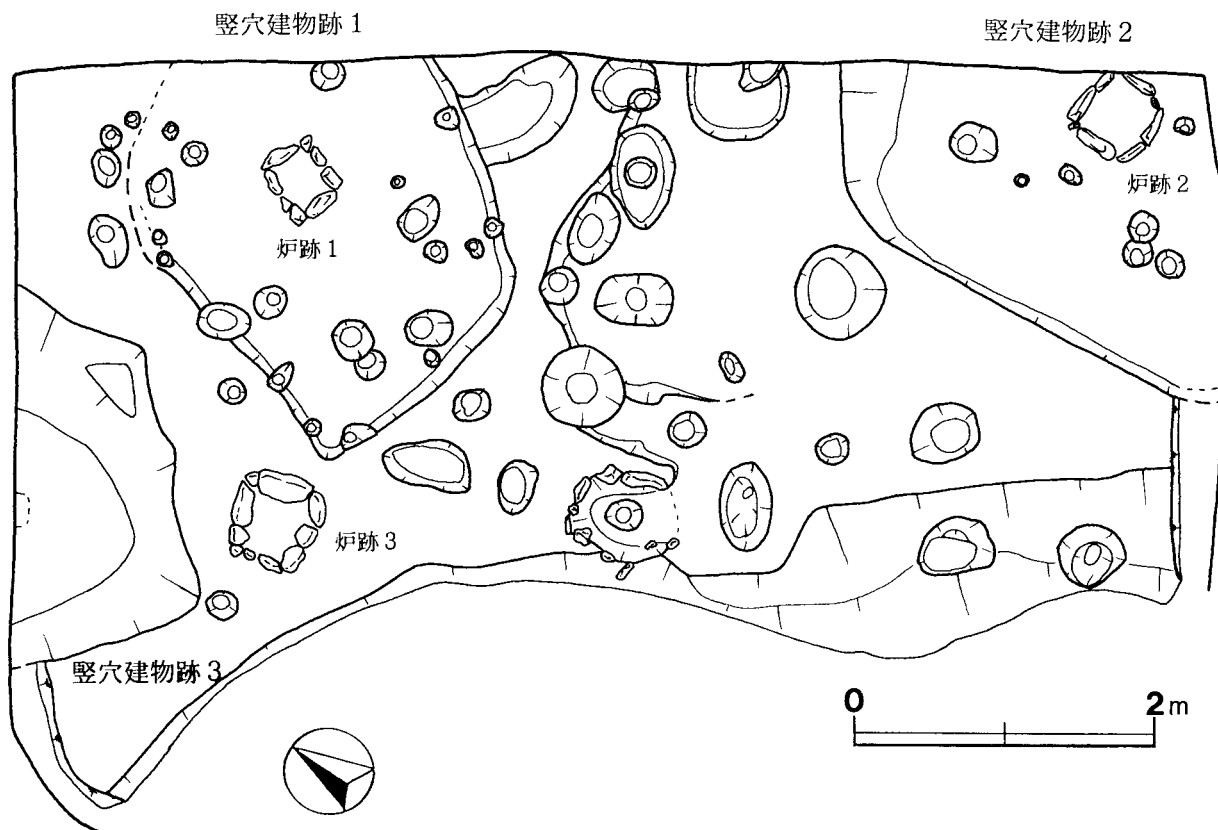
建物の柱穴や壁周溝となりそうな遺構がみられたものの、小面積であるため詳細は不明である。

旧流路の底をさらに1m以上トレンチで掘り下げると、縄文時代中期初頭の石敷炉を確認しており、(V面) 竪穴建物跡が存在していたと考えられるが、トレンチでの調査のため詳細は不明である。

北側の弥生時代後期後半の遺構面(Ⅲ面)では、竪穴建物跡か掘立柱建物跡の柱穴や土坑の他、有段口縁の甕とくの字口縁の甕が口を合わせた状態で出土している。副葬品がないため不明な点も多いが、合わせ口の土器棺墓であると考えている。弥生時代の合わせ口の土器棺墓は、県内ではあまり類例がないため、今後さらに詳しく検討していく必要がある。この面の下層である縄文時代後・晩期の包含層を掘削後は、縄文時代中期後半の土器を大量に含んだ遺物包含層の掘削を行い集石状遺構を確認している。調査当初は認識できなかったものの、集石除去後は石囲炉や柱穴を確認しており(Ⅳ面)、これらの土器や石は竪穴建物跡埋土の中央の落ち込みに堆積したものであることがわかっている。完全な石囲炉は全部で3基を確認し、これに炉跡の可能性のあるもの3基を合わせると、竪穴建物跡6棟以上が重複して存在していた可能性があり、今後集落の時期幅や建物の変遷などを詳細に検討していく必要がある。この他にも埋甕がされた土坑を2基確認しており、うち1基は甕上部に石の蓋が置かれていたようである。

上記の検出状況によると、調査地は旧橋本川の氾濫や土石流によって幾度も地形を変化させており、生活域としては決して安定した場所に立地しているとは言えないものの、遺構密度自体は低くはなく、縄文時代から現在までの間、自然災害に遭いながらも営み続ける人々の生活の痕跡を数多く確認している。これらのことから、調査地が当遺跡の縁辺部に当たるとした昨年度の見解を修正する必要があると思われる、徳丸遺跡自体は橋本川対岸の丘陵裾へも広がっているものと考えられる。(安中)





E区北側Ⅳ面 全体図 (S=1/50)



竪穴建物跡1 完掘状況 (西から)



竪穴建物跡2 遺物出土状況 (南から)



竪穴建物跡1 土器出土状況



炉跡3 検出状況

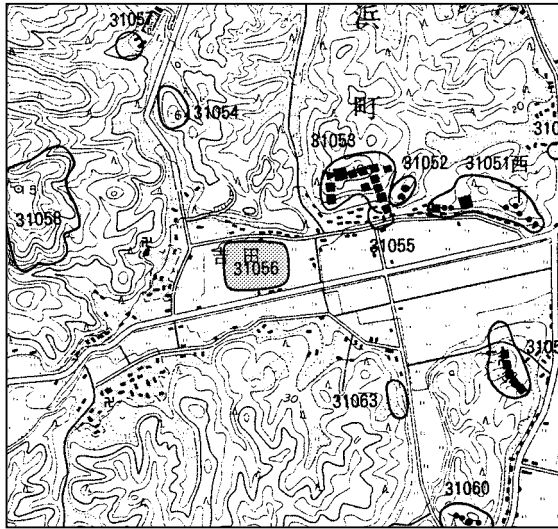
吉田C遺跡

所在地 鹿島郡田鶴浜町吉田地内

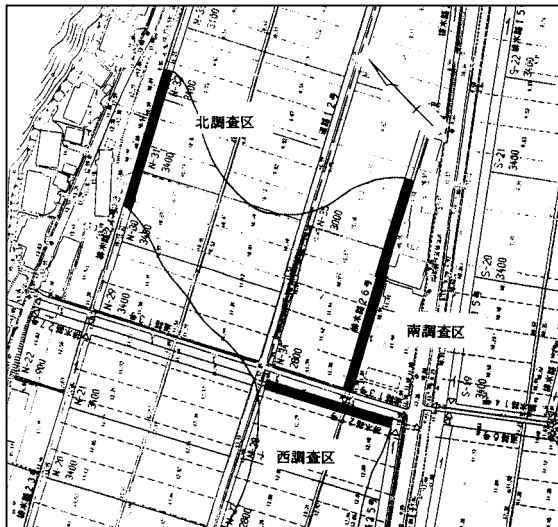
調査期間 平成12年8月7日～平成12年9月21日

調査面積 520m²

調査担当 岩瀬由美 西田昌弘



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図 (S=1/4,000)

本遺跡は吉田川によって開析された小さな谷状地形の北側、赤蔵山南東裾部に立地している。調査区が3カ所設定されたことから、各々を北・南・西調査区と呼称し調査を行った。

北調査区は、ほぼ全域が鞍部で占められていた。立ち上がりは、東側のみ確認している。鞍部以東で明確な遺構は確認されず、遺跡の縁辺部と理解される。遺物は、肩部寄りで少なく、調査区中央部から西側にかけて多く見られた。8世紀後半から9世紀に比定される土器が主体を占める。特に、中層から下層にかけては完形に近い須恵器杯等の出土が目立った。墨書土器も数点出土しており、「地」や「厨」等の文字を確認している。また、木製品の出土も多く、板材や杭状木製品をはじめ木簡、箸などが出土している。木簡は3点出土しており、内1枚は付札であった。長さ190mm、幅27mm、厚さ2mmを測り、材の一端の左右に切り込みを入れている。墨書は表面のみで、「三国子一石」と記されていた。その形状や近世の駿河・遠江国における村明細帳に「四国」という稲の品種が見られることなどから、本木簡が稲の品種を記した付札であると推測できる。他2枚は切り折りや破損のため、詳細は不明であるが、いずれも「戸主+人名」と読みとれることから、籍帳に関連した木簡と考えられる(註1)。

南調査区は、小穴や溝が散在する程度で遺構は希薄であった。遺物も縄文土器と土師器が散見される

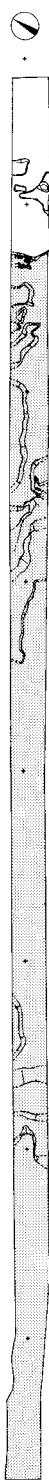
にとどまる。遺跡の南側縁辺部であろう。

西調査区では土坑、小穴、鞍部を検出している。小穴は、中央および南側鞍部に挟まれた区域で多く検出された。土層観察等から柱穴と判断できるものも数基確認できたが、建物跡としてプランを把握するまでには至っていない。時期は、弥生時代終末から古墳時代初頭に比定されよう。また、北側鞍部から、ほぼ同時期の土器が多く出土している。肩部より2～4mの範囲内での出土が多いことから、小穴群がある南側より投げ込まれたものと推測される。

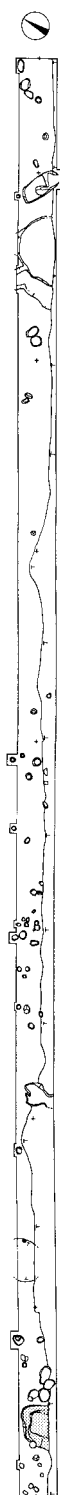
以上を概観すると、調査区間で時期差が窺える。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては遺跡の南西部に、古代では北半部にその中心域が予想できよう。特に古代に関しては、建物跡は未検出ながら、「厨」の墨書土器と付札の出土が注目される。両者の出土は官衙もしくは荘園の存在を窺わせるものであり、周辺の遺跡や地形を踏まえた検討が今後の課題となつてこよう。(西田)

(註1) 本遺跡出土の木簡に関しては、国立歴史民俗博物館教授平川南氏より御教授を賜った。

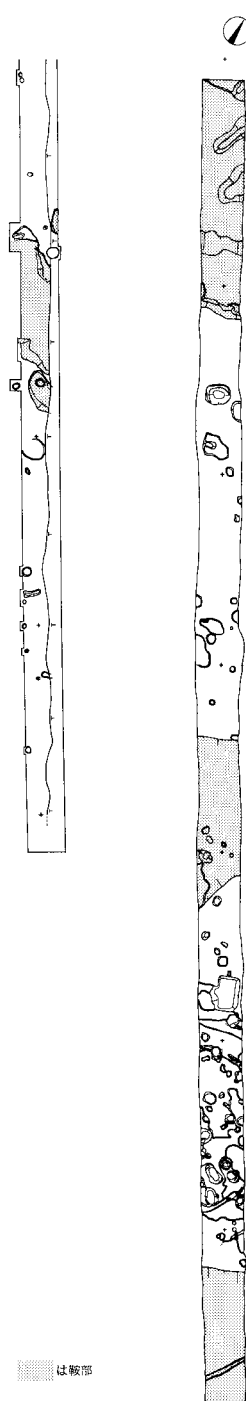
北調査区



南調査区



西調査区



0 10m

調査区遺構図 (S=1/400)



北調査区 板材出土状況 (西から)



西調査区 小穴群完掘状況 (南から)

「
＜三
国
子
一
石
」



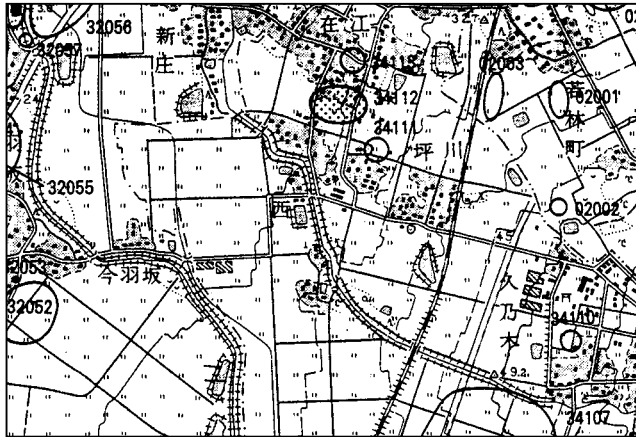
付札とその釈文

坪川遺跡

所在地 鹿島郡鹿島町坪川、在江地内 調査期間 平成12年6月27日～平成12年8月7日

調査面積 300m²

調査担当 土屋宣雄 大西 顕



遺跡位置図 (S=1/25,000)

本遺跡は、鹿島町最北端の越路北部地区、徳田段丘西端に立地している。地山面の標高は27～30mで、西側に傾斜している。

遺跡は昭和30年代後半の耕地整理の際、古墳時代（宮地式）の土師器が採集され発見された（鹿島町『鹿島町史資料編』1966）ものである。

遺跡南側には鞍部をはさんで白山神社がある。ここからは珠洲焼甕が出土している他、現在でも境内には、付近より出土したと思われる五輪塔が多数並んでいる。

今回の調査は、県営ほ場整備事業に係る、排水路工事箇所について実施したもので、遺跡のなかでは南縁部にあたる。調査区中央の道を境に東側を「東区」、西側を「西区」と呼称している。遺物は古墳・古代・中世のものまで出土しているが、主体は中世である。ベース面は概ね粗砂～礫層である。この下部には同質の黒色層が存在し、ここからの湧水が激しかった。

東区

遺構・遺物量とも少ない。削平の度合いが大きいものと推定される。

西区

土坑と柱穴が多数確認された。土坑は深さ1m弱の比較的深いものが多い。

SK7は1辺約1mの隅丸方形の平面プランを呈し、深さ約90cmを測る。覆土中位より柱状の木製品が出土している。径15cm、長さ30cm程度のものである。地山面にとどかず覆土内に浮いている状態での出土であった。

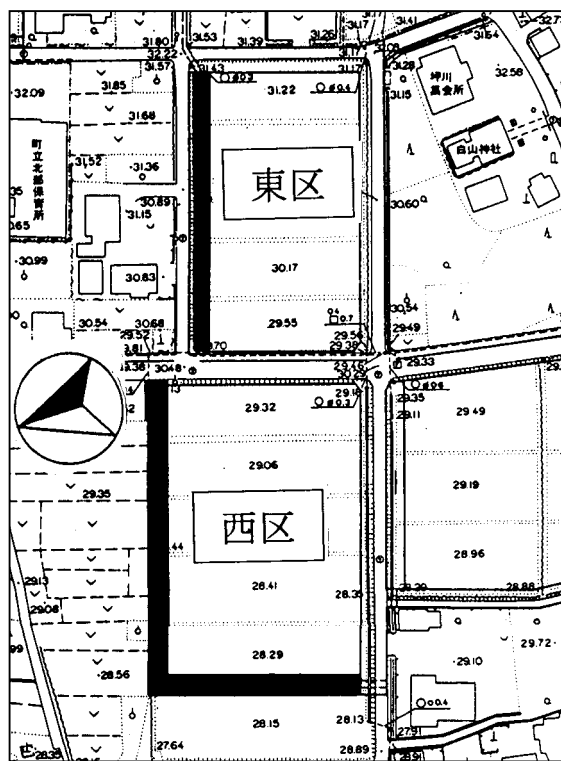
SK11は1辺約1.2mの隅丸方形の平面プランを呈し、深さ約60cmを測る。出土遺物等から14～15世紀に所属する遺構と思われる。注目される遺物として柱状の木製品が、底に直立するような状況で出土している。径25cm、長さ60cm程度のものである。木製品の周囲には地山質土が若干堆積している。直立させた後、倒れないように少し埋め戻した可能性がある。類例に乏しいため性格付けは難しい。井戸の祭祀では、井戸廃棄後、フシを抜いた竹筒を据え付ける祭祀儀礼がある。これに類似する遺物の可能性もある。ただし、井戸枠が発見されないため井戸と断定できない。大きな柱穴の可能性もあるがこの場合、掘方が大きすぎる感をもつ。今後の類例を待ちたい。

柱穴は4～5区で集中して確認された。SB01-P1のように、隅丸方形の平面プランをもち、80×60cmの比較的大きな掘方をもつ柱穴も存在する。

中世の遺物としては珠洲焼、土師器皿が多い。時期は14～15世紀が主体で16世紀代のものまで見られた。

なお、西区の最西端で東西方向の鞍部を検出している。そして地形より判断して遺跡の中心は、より標高の高い、調査区の北側畑地にあるものと判断される。

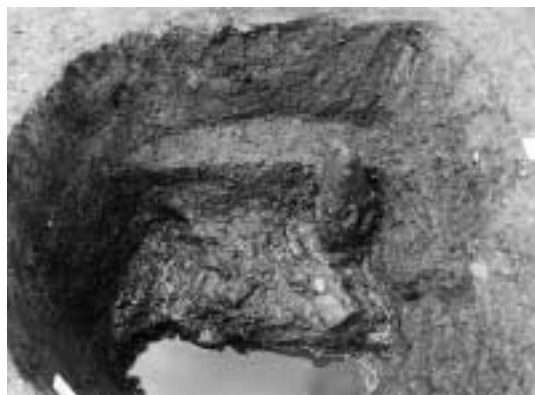
(大西)



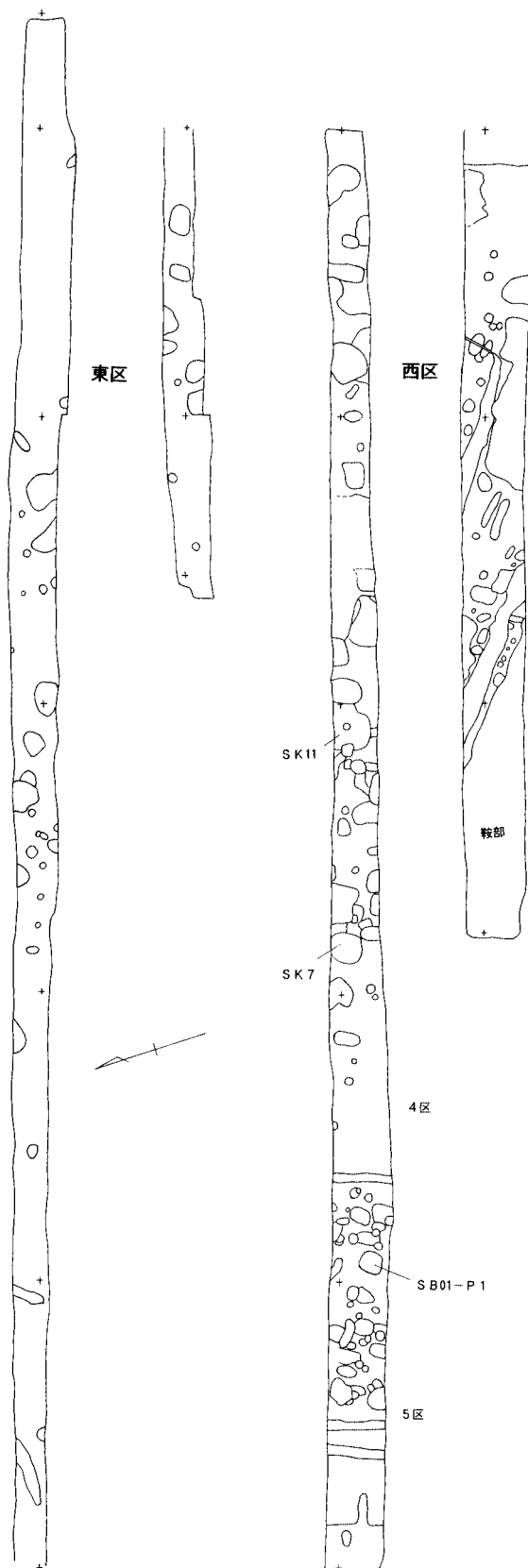
調査区位置図 (S=1/2000)



SK11 柱状木製品出土状況



SK7 柱状木製品出土状況



坪川遺跡遺構略図 (S=1/250)

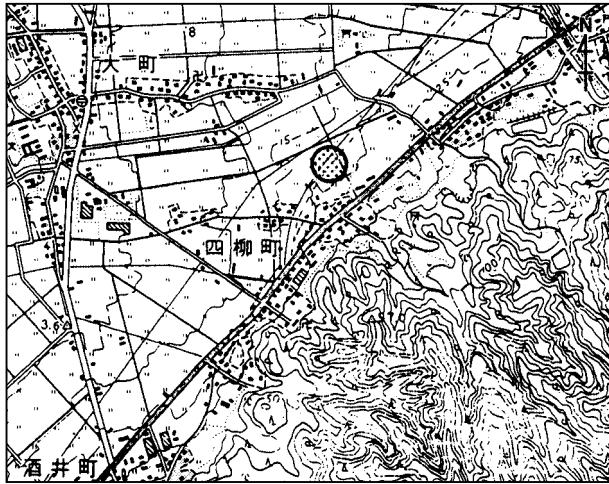
四柳白山下遺跡（第7次調査）

所在地 羽咋市四柳町地内

調査期間 平成12年5月10日～同年11月15日

調査面積 7,000m²

調査担当 宮川勝次 岡田有紀子



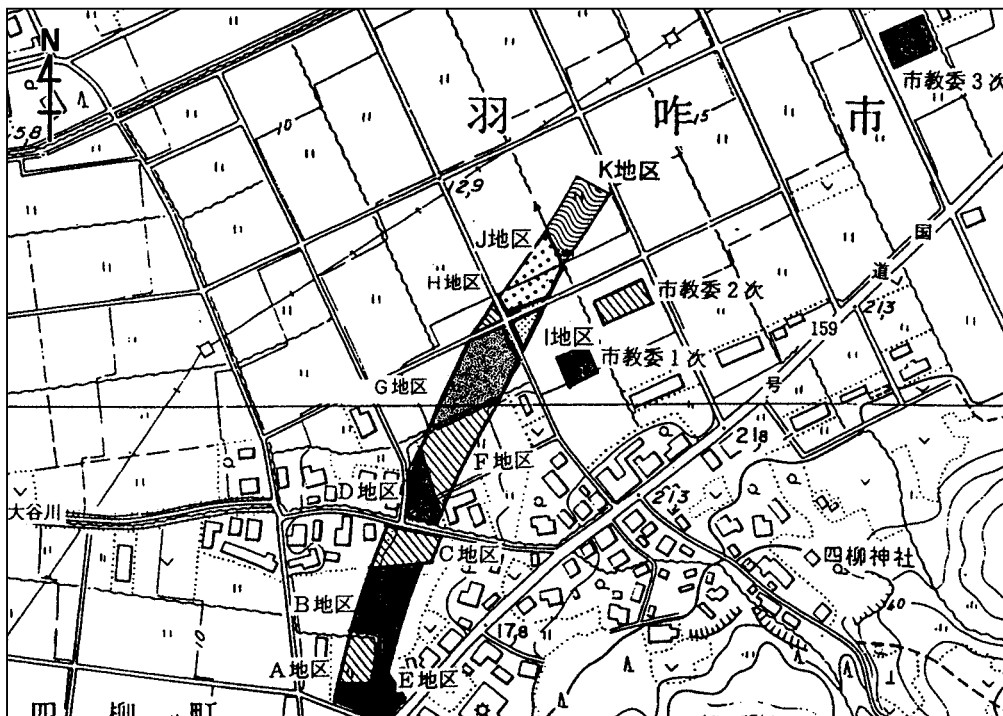
遺跡位置図（S=1/25,000）

本遺跡は、能登半島の基部にある邑知地溝帯の基石ヶ峰側に所在する。調査原因は、国道159号線鹿島バイパス改築工事に伴うもので、平成6（1994）年度から今年度までの7年間にわたって調査が行われた。

これまでの調査で、縄文時代中期から江戸時代にかけての集落、耕作地が度重なる土砂災害に遭いながら断続的に営まれたことが明らかにされている。

昨年度はJ地区の中世末から近世（第0・I面）、中世前半（第II面）、古代末から中世前半（第III-0、1面）、平安時代（第III-2面）、飛鳥時代から奈良時代（第IV面）、古墳時代（第V面）、弥生時代後期から古墳時代前期（第VI-1面）の調査を行った。今年度は昨年度調査した下層面を掘り下げるとともに、さらにその北側のK地区の調査を行った。

以下、調査地区ごとに上層から順にその概要を述べる。



調査区位置図（S=1/5,000）

[J地区の調査]

第VI面（弥生時代後期～古墳時代前期）

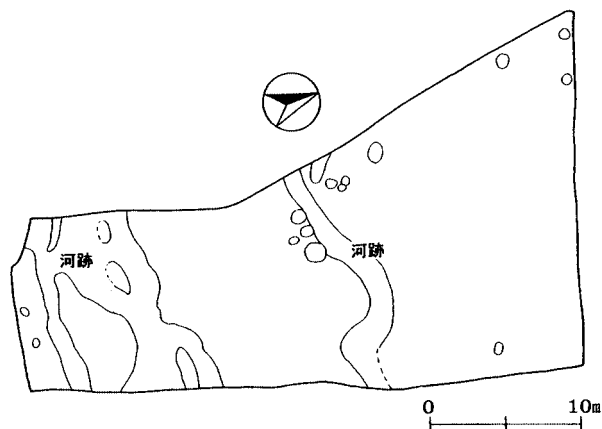
J地区の第VI面は昨年度調査したVI-1面を含む4面に細分され、今年度はVI-1面以下の3つの面を調査した。

第VI-2面では自然流路と思われる河跡のほかに明確な遺構は検出されなかった。

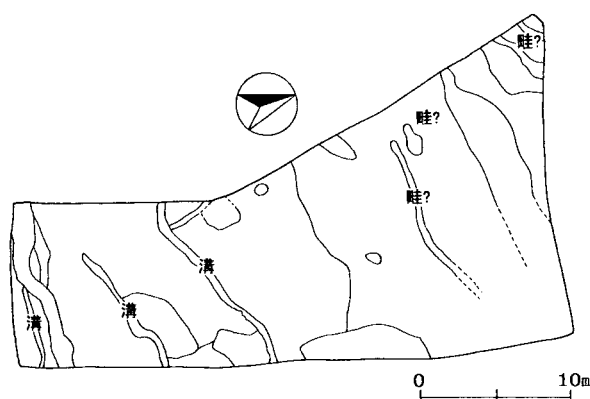
第VI-3面では2条の河跡と土坑等が検出された。

第VI-4面では調査区の南側で等間隔（5m）に並ぶ3条の溝を検出し、また、遺存状態は悪いものの畦と思われる高まりを数箇所確認した。等間隔に並ぶ溝が排水として機能していたと考え、当遺構面は水田跡の可能性が考えられる。

全般的に遺構、遺物とも希薄であったが、遺物については弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土しており、中心は弥生時代後期に位置づけられるようである。



J地区 VI-3面 遺構略図 (S=1/500)

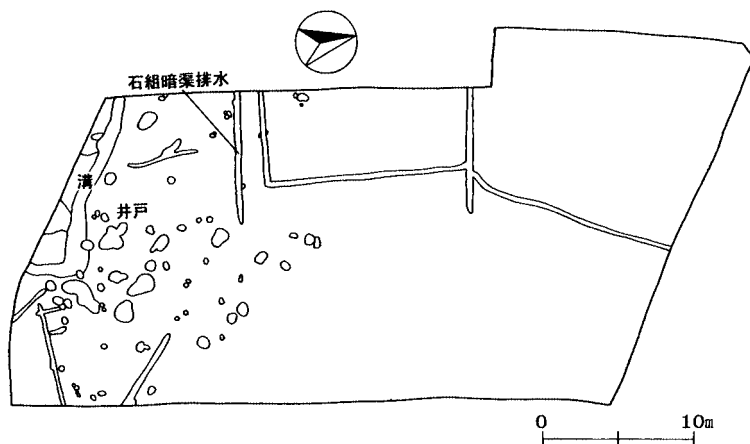


J地区 VI-4面 遺構略図 (S=1/500)

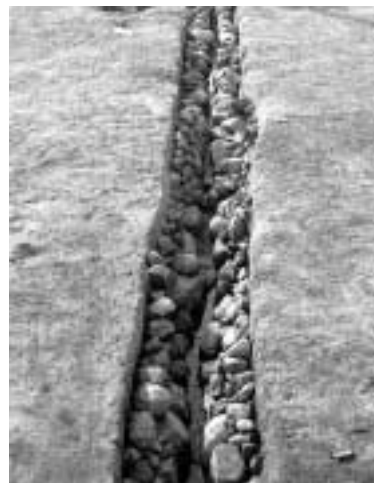
[K地区の調査]

第0・I面（中世末～近世）

J地区から続く集落跡に連続する面である。調査区北側では遺構面は検出できず、南側で数条の溝、土坑などを確認した。調査区の南側で東西にのびる石組の暗渠排水を検出している。石を両側に組んで溝を作り、その上に石で蓋をしたもので、東西のレベルにはほとんど差はない。調査区の中央部で途切れ、現状ではその性格は不明である。遺物は珠洲焼を中心とした陶磁器がみられるが、遺構、遺物ともにこれまでの調査区に比べ減少しており、当調査区が集落の縁辺部に位置していると考えられる。



K地区 0・I面 遺構略図 (S=1/500)



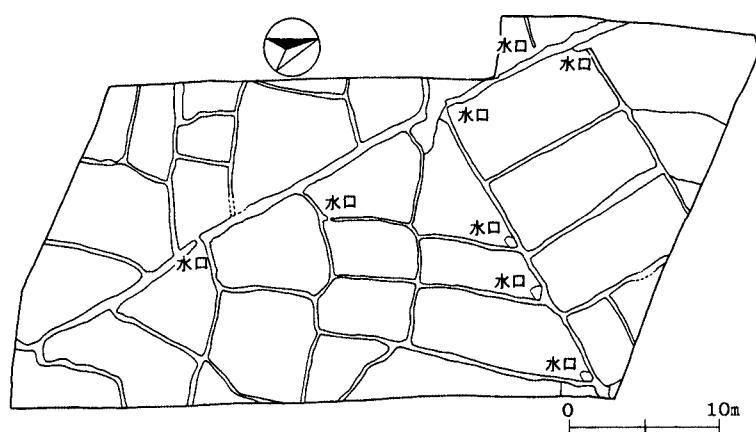
K地区 0・I面 石組暗渠排水 (東から)

第Ⅲ面（古代～中世）

第Ⅲ面は調査区の全体で水田跡を検出した。大畦畔が調査区の中央を南北にのび、それに直行または斜めにはしる小畦畔を確認した。水田は南から北へ、東から西へ向かって低くなる自然地形を利用して段状に作られ、大畦畔を境に西側は東側より一段低くなっている。

水田区画のコーナー部分には畦畔の途切れるところや、砂が堆積し窪み状になったところがあり、これらは水口と想定される。水田区画の中には水口が確認できないところもあり、水田における水の供給路の問題については今後の検討が必要である。遺物は包含層および畦の内部より土師器、須恵器が出土している。

水田面からは多数の人間の足跡や動物の足跡、農具痕等を検出している。水田区画の中には足跡が畦畔に平行して検出されているものもみられ、農作業の内容を検討する手掛かりとなるだろう。



K地区 Ⅲ面 遺構略図 (S=1/500)

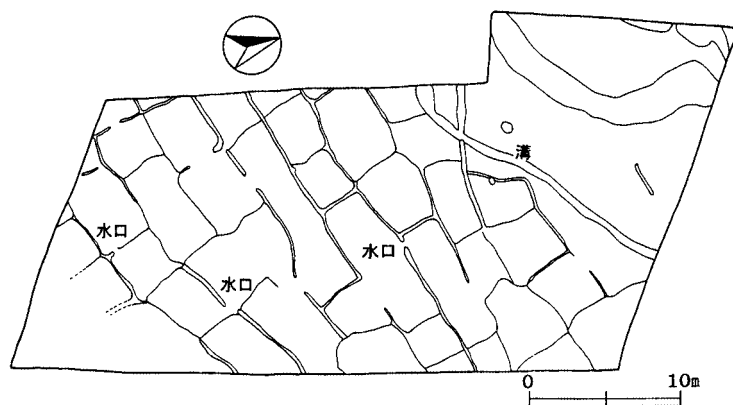
調査区北側で検出された方形の水田は3枚とも同じ大きさ（約10m×5m）で、四柳ミッコ遺跡（第2次調査）E地区で検出された中世水田跡と方向や規模がほぼ一致している。またこの方形の水田の南端の畦から四柳ミッコ遺跡の水田の北端までの距離は約50mで、半町歩に相当し、条里地割の可能性もある。



K地区 Ⅲ面 完掘状況（北から）

第IV面（飛鳥～奈良時代）

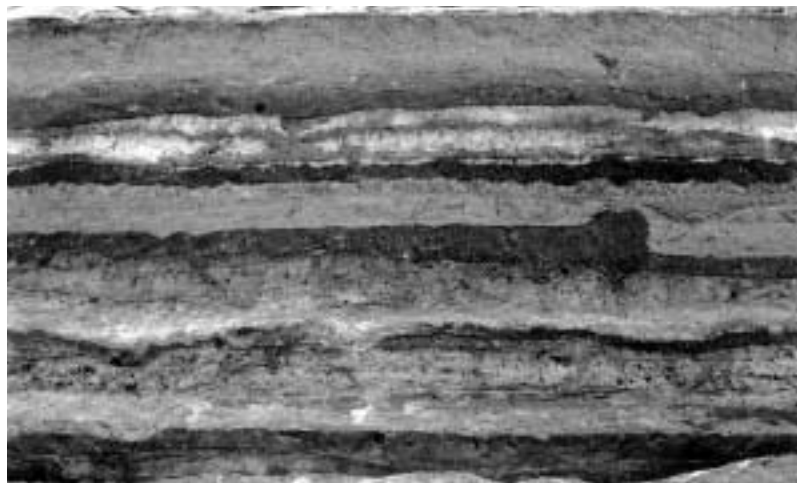
J地区で検出された飛鳥～奈良時代の集落跡に連続する面である。当遺構面では数条の溝やピットが検出されるほか、礫溜り状の土坑が数箇所検出された。遺物は、土師器、須恵器などがみられるが、遺構、遺物ともに希薄である。



K地区 V面 遺構略図 (S=1/500)



K地区 V面 完掘状況（東から）



K地区 西壁土層断面

第V面（古墳時代）

G地区、J地区で確認された水田跡と連続した水田面で、古墳時代に位置づけられる。畦畔はやや不明瞭なものもあるが、段差によって小区画を確認することができた。第III面とは異なり、北から南、東から西へ向かって低くなる地形に即して段状に水田がつくられ、1区画が小規模である。

畦畔の中には自然木を用いたものが確認されており、畦畔の構築時や補強のための芯材として使用されたと考えられる。

今年度の調査区は遺構、遺物ともに希薄で、また地形的にも谷部に位置することから、遺跡の縁辺部に相当すると考えられる。今後、土層の対応関係や遺跡構造の解明など、各調査地点間の検討を行っていくことが必要であろう。（岡田）

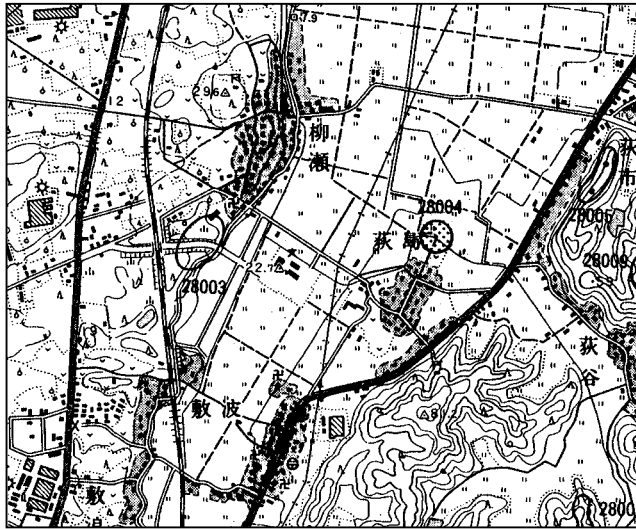
荻島遺跡

所在地 羽咋郡志雄町荻島地内

調査期間 平成12年5月18日～平成12年7月3日

調査面積 480m²

調査担当 立原秀明 加藤克郎



遺跡位置図 (S=1/25,000)

荻島遺跡は邑知地溝帯内の南西端で、海岸砂丘の後背地に当たる平野部に位置する。県営ほ場整備事業に係わる発掘調査としては、平成11（1999）年度に引き続き、今年度は第2次調査に当たる。今回の調査区では縄文時代前期から中世にかけての遺構・遺物を確認している。

昨年度調査したA・B区の北東に隣接するE8～10区からは、A・B区でも確認された鞍部が確認され、古墳時代後期～平安時代までの土器が出土している。本遺跡の位置から西方約500mを北流する長者川にかけての一带は数十年前までは深田であったところであ

る。この確認された鞍部以西一帯は低湿地帯であったことが想定される。

F区においては2区で8世紀後半の古代の横板井籠組井戸が1基検出されている。3区では幅約2m、深さ約1mの南東から北西へ流れる溝が確認され、口縁部及び胴部中央などに打ち欠いた痕跡の存するほぼ完形の古墳時代後期の土師器壺3点が出土しており、この溝の性格を究明する上で興味深い事例である。4～6区では古墳時代後期の掘立柱建物の柱穴と思われるピットが非常に多数切り合って検出され、掘立柱建物4棟以上を復元することができる。また7区では古代の川の左岸が確認され、「真勝」と記された墨書土器（8世紀後半）が出土している。

約40年前に踏査され、縄文時代前期の遺物が出土している周知の荻島遺跡とは現在の樋ノ川を挟んで対岸に当たるG・H区では縄文時代前期の土器が攪乱層から発見されたが、当時期に比定され得る明確な遺構は確認できなかった。以上のように重要な遺構・遺物が多数確認されいるが、現在遺物等の整理は途中の段階であるので、今後さらに十分に検討していきたい。

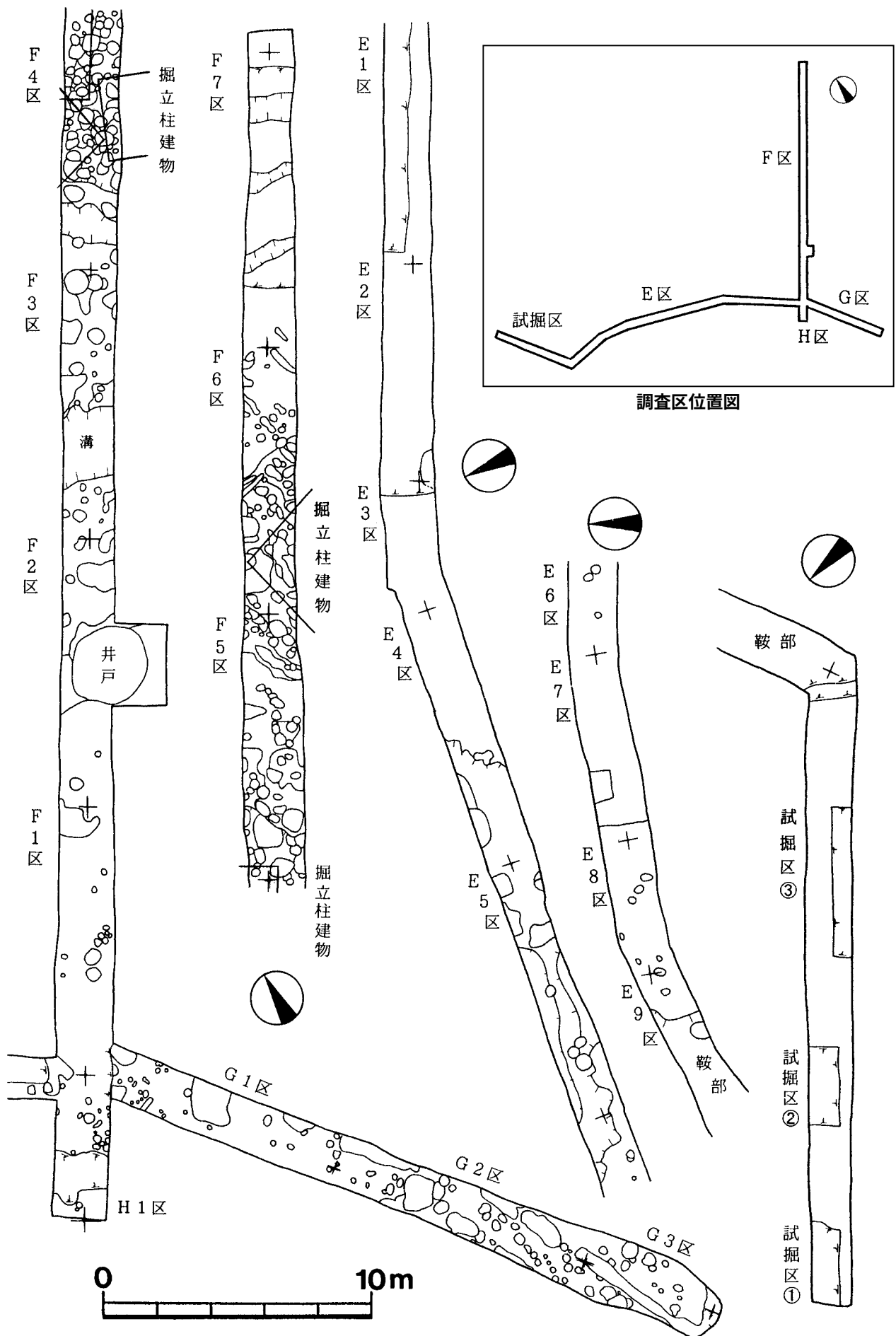
（加藤）



F2区 井戸 検出状況



F4区 掘立柱建物柱穴群 検出状況



遺構平面図 (S=1/200)

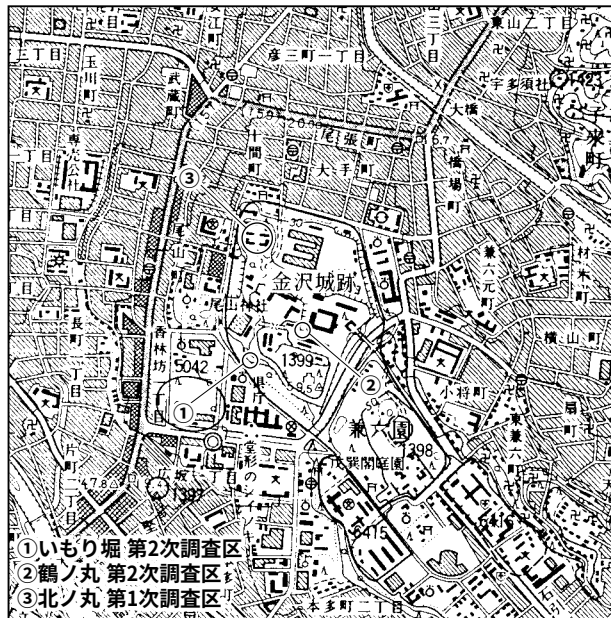
金沢城跡

所在地 金沢市丸の内地内

調査面積 いもり堀第2次調査区 150㎡ 鶴ノ丸第2次調査区 50㎡
北ノ丸第1次調査区 850㎡

調査期間 平成12年5月9日～8月28日

調査担当 富田和気夫 滝川重徳 湊屋玲美 土田友信



遺跡位置図 (S=1/25,000)



金沢城復元図といもり堀第2次調査区 (S=1/2000)

金沢城跡は、金沢城址公園整備事業に係る埋蔵文化財調査が平成9年度から進行している。今回は平成12年度上半期調査分についてその概略を述べる。

いもり堀第2次調査区 (稲荷屋敷下地点)

当調査区は薪ノ丸の南方の近代石垣と金沢広坂消防署の間に位置する。調査区の位置を江戸時代後期の絵図に重ね合わせると、いもり堀と稲荷屋敷の境界に相当する。境界を示す部分には石垣が描かれている。近代以降の当調査区は、いもり堀が埋め立てられ、稲荷屋敷下石垣の上半部が取り壊された。そして、その北方に新たな石垣 (近代石垣) が設置されたと考えられる。昭和18年の旧陸軍建物配置図では、事務所と梱包所の一角が相当する。

調査区では、南に面を向けた東西約30mに渡って石垣が検出された。石垣は、取り壊しを免れた下半部が地中に埋まっていたものである。検出した石垣高、約1.5m (最深部約2.5m) で、石垣はさらにその下へ続く。石垣石の総個数は、約120個である。戸室石を使用した打ち込みハギ技法が用いられ、約80°の勾配をもつ。石垣

石は規格化されておらず、寸法・面の調整等は統一されていない。面は割面と自然面の割合が多く、ノミ加工面は最小限に抑えられている。標準的な寸法は大方50cm (幅) × 50cm (高) × 110cm (控) で、これに大型・横長・小形の石材が加わる。石垣の隙間には、詰石として戸室石小形割石や河原石を詰めている。戸室石小形割石の一つの特色に、赤・青戸室石がそれぞれ色別に群集している。刻印は、約20種類・約60～70個が刻まれている。そのほとんどは小形で正面に刻まれているが、中には2種類で1セットになっているものや胴部に刻まれているものもある。積石は、石材の形状に即して積み上げられている。積みの様相は、部分的に落とし積みが見える箇所があり、改修を受けている可能性も否定できない。

石垣内部の構造を把握するため、石垣に直交して4本のトレンチを入れた。内部の構造を、推定できる構築順序で述べていく。まず、石垣面から約2.5m～3m後方地点で、地山を掘削する。次に、根

石を据え、石垣裏に栗石を充填する。栗石として使用されている石は、河原石が主体であり、少量だが戸室割石も含まれている。栗石が充填されている範囲は、石垣裏から地山の範囲で、断面で見ると後方へ傾斜する三角形を呈している。栗石の大きさは、石垣石に接する範囲では、大きめの河原石や戸室割石が使用されているが、それ以外の範囲では、大・中・小の河原石が使用されている。石垣石約二段分の高さまで石垣を積み上げた段階で、石垣裏全体に盛土し整地する。以下、これを繰り返す。

調査区東半の掘方は地山ではなく、固く締まった礫層であった。その範囲は、当地点の石垣が、部分的に旧いもり堀の埋土を掘り込んで構築されたことを示す。

今回の調査で検出した石垣は、平成10年度の五十間長屋の調査で確認された、寛永8年（1631）構築の石垣と、全体的な様相は類似しており、寛永期前後の所産と推測される。石積みと石垣石の加工状態が若干未発達で、刻印が小型であることなど、相違する要素があり、今後の検討とされる。いずれにせよ、築城以後、寛永期にかけて、いもり堀の整備過程が明確化されてきた点で、成果があった。（土田）



稻荷屋敷下石垣

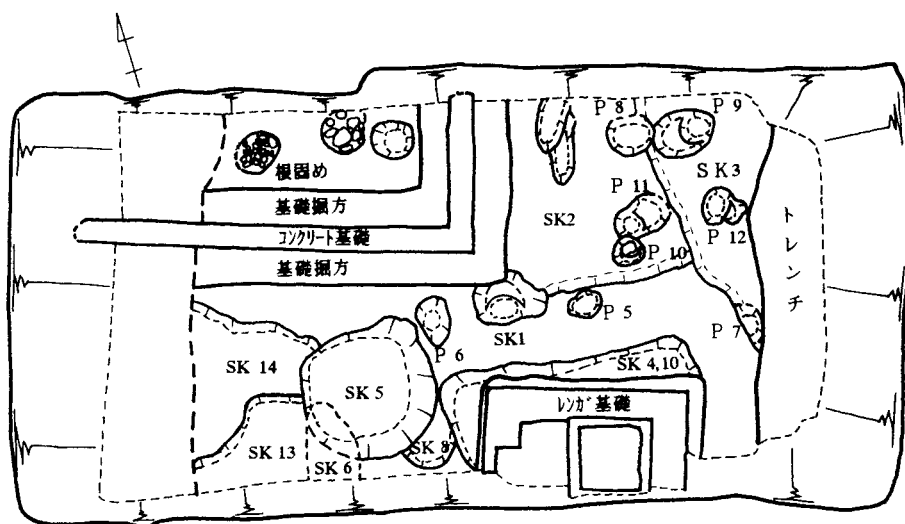
鶴ノ丸第2次調査区（橋爪門枅形地点）

橋爪門続櫓東側に位置する。寛永8（1631）年の大火後に、橋爪門枅形の一角に取り込まれた地点である。近代以後の改変により、橋爪門枅形に関連する遺構は削平されていたが、枅形形成以前に遡る遺構・整地土がある程度遺存していた。

整地土は4層に大別できる。最上部A層が枅形内造成土、中間のB・C層が寛永8（1631）年以前の初期の金沢城に係る整地土、最下部D層が16世紀後半に遡りうる整地土に想定される。

本調査区の遺構の主体はC層をベースとする土坑で、他に建物基礎（根固め）とみられる円形の集礫が検出されている。遺物は土師器皿を中心に、陶磁器・瓦・鉄砲玉等が出土している。遺物の特徴から、遺構の多くは天正後期～慶長初期頃（1580～1600年代）に形成されたと考えられる。なおD層面、あるいはC層を切り込む遺構の更に下部でピットが検出されており、遺物は少ないものの、金沢御堂時代の遺構である可能性がある。

今回の調査は小規模とはいえ、初期の金沢城を探る上で良好な資料を得ることができた。



鶴ノ丸第2次調査区 遺構略図 S=1/100



鶴ノ丸第2次調査区全景

北ノ丸第1次調査区（御宮・藤右衛門丸地点）

【御宮地点】寛永年間～明治11年の間、東照宮（御宮）が存在した郭に位置している。郭縁辺の調査区では、主に17世紀前半の陶磁器や土師器を含む近世の整地土を検出した。御宮造成時の整地層と考えられる。また郭の南西の一角では、御宮に関連すると思われる玉砂利敷きの路面を検出した。調査区西辺では、郭の西端から約2m内側に、南北に延びる東面の石垣を検出しているが、石垣の年代や性格については今後の検討を要する。

また北斜面の2箇所（NS1区、NS2区）上端では、いずれも宝暦大火以前の絵図に見られる郭北縁の石垣を検出し、さらに北の斜面下では郭造成以前に空堀が存在したことが分かった。NS2区では石垣の北斜面に棟石を転用した石段を検出した。江戸時代後期の『金沢城絵図』（成巽閣蔵）ではその付近に小口がみられることから、神社の通用口として機能したものと考えられる。また石段北

のテラスから、多量の石瓦（緑色凝灰岩製）、燻瓦、葵の紋が陽刻された石鬼1点等が出土している。石瓦や燻瓦は出土層ごとに様相が異なっており、御宮のいずれかの建物に使用された瓦が、時期を違えて何度となくこの斜面に廃棄されていたようである。城内での石瓦の出土は初例であり、御宮という空間、また城内の建築物に葺かれた瓦の様相を考えるうえで非常に貴重な資料を得ることができた。

【藤右衛門丸地点】藤右衛門丸外周をトレンチ調査した。郭縁辺ということもあり遺構の数は少ないものの、近世の整地土と、17世紀初頭に年代を特定することができる遺構を確認した。調査区東端では、慶長期の陶磁器、土師器を多量に含む土坑を検出している。郭北辺中央では、側面に木杵を当てた痕跡のある幅約1mの溝を検出した。出土遺物から17世紀初頭のものと考えられる。また、郭北辺西側では地表より約2.5m下で、郭を造成する以前の茶毘に関連すると思われる遺構と、焼けた骨片が出土している。金沢御堂時代に遡る可能性もある、重要な資料であろう。（湊屋）



藤右衛門丸 茶毘遺構



御宮 遺構検出状況



御宮 NS2区南から



御宮 NS2区 石瓦・燻瓦出土状況

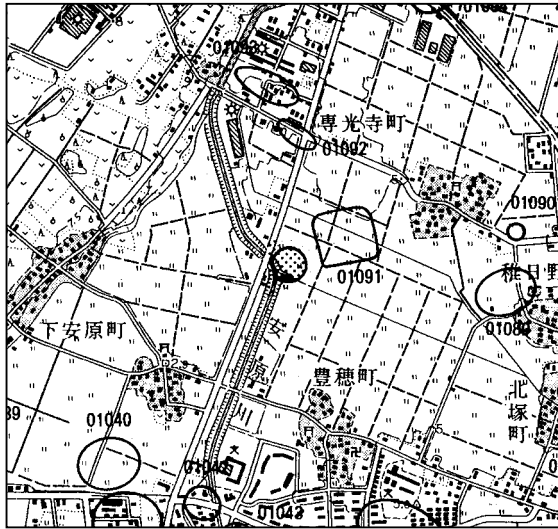
豊穂遺跡（第2次調査）

所在地 金沢市豊穂町地内

調査期間 平成12年4月17日～平成12年6月2日

調査面積 800m²

調査担当 松浦郁乃 菅野美香子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

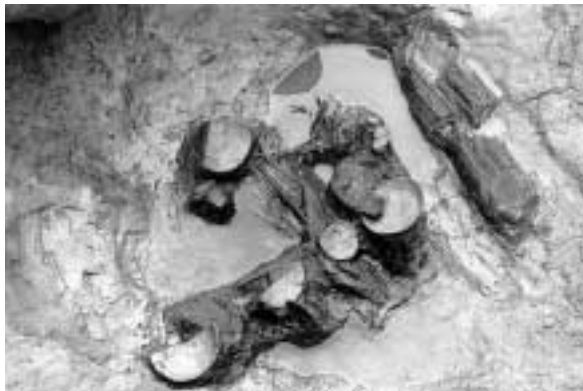
豊穂遺跡は金沢市の北西部を流れる安原川下流の右岸に位置し、調査区周囲には田園が広がる。本調査は安原川広域基幹河川改修工事に伴い実施された。今年度は平成11（1999）年度に引き続き、2年目の調査となる。今年度は昨年度調査区の南東側の調査を行った。昨年度の調査では平安時代・中世・近世の溝・土坑などが確認されており、今年度の調査では古代・中世の遺構・遺物を検出した。

調査区の南側では掘立柱建物跡1棟（1間×2間）・井戸2基・溝多数を検出し、集落の一角であったと考えられる。時期は、出土した遺物より鎌倉時代に位置づけられる。調査区中央で検出された、東西に直線的に延びる溝（SD2011）は、その内外で遺構の

性格が異なることから、集落域を画する区画溝と推定でき、集落は溝（SD2011）の南西域に広がっていたことがわかる。掘立柱建物は後世の削平等により遺存状態が悪く、詳細な性格は不明である。一方、井戸2基に関しては良好な資料が得られた。井戸（SE2001）は曲物積上げ井戸で、最下段のみ曲げ物が残されており、上二段は抜き取りの痕跡が確認できた。井戸（SE2002）では底から土師皿4点・折敷状木製品1点、箸状木製品多数が出土しており、井戸を廃棄する際の祭祀が想起できる。集落域の南東には溝（SD2001）が検出され、古代～中世の遺物が出土した。底からは10～20cmの円礫が多く出土し、護岸を行っていた可能性が考えられる。

調査区の北側では、溝5条と溜枡状遺構3基を確認した。溝はいずれも昨年度調査区に続く。中央の溜枡状土坑の脇には杭が数本打ち込まれ、その周囲からは木材が出土しており、護壁もしくは簡易な足場状の施設の存在が考えられる。遺物量が少ないため溜枡状土坑は時期を特定するには至らなかったが、溝は古代から中世にかけて流路を少しずつ変えながら機能していたようである。現在も溜枡状遺構からは澄んだ水が豊富に湧き、当時の人々にとって貴重な水資源の一つであったであろうことが推測される。

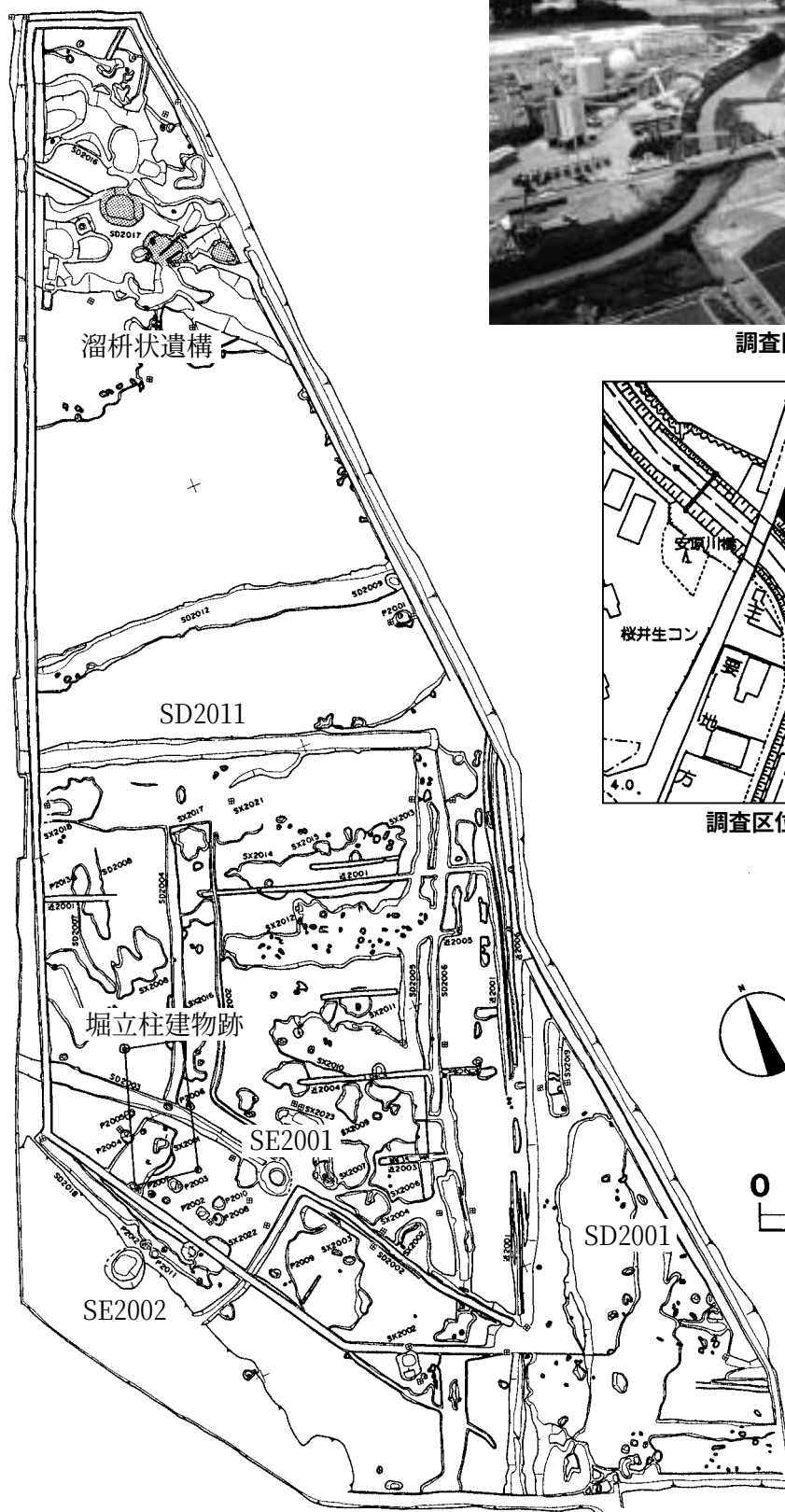
また、調査区中央部からは10～15cm程の不整形な窪みが多数検出された。時代は特定できないが、耕作痕と考えられる。（菅野）



SE2002 遺物出土状況



溜枡状遺構完掘状況



調査区平面図 (S=1/250)

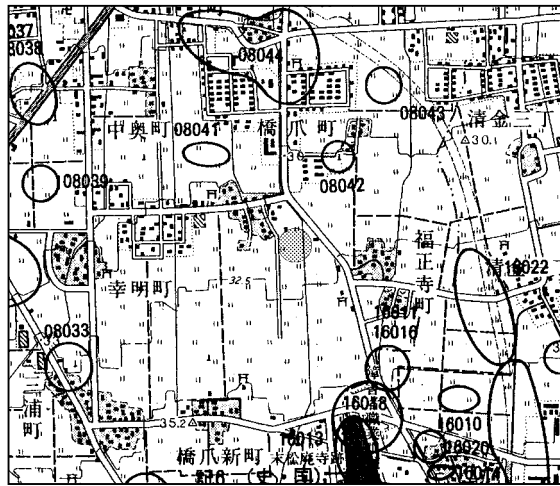
はしづめ
橋爪B遺跡

所在地 松任市橋爪町地内

調査期間 平成12年4月27日～平成12年6月26日

調査面積 600㎡

調査担当 土屋宣雄 大西 顕



遺跡位置図 (S=1/25,000)

橋爪B遺跡は、手取川扇状地の扇央部に立地し、七ヶ用水系の一つ、郷用水西川の東西に分布する。

今回の調査は、県営ほ場整備事業中奥地区に係るもので、調査区は西川の西側に平行する排水路敷設工事部分の幅約2m・延長約300mである。

調査の結果、弥生時代末から中世に至る時期幅を確認したが、主体的なのは、古代と中世の二時期と思われる。検出された遺構は、竪穴建物・掘立柱建物・土坑・溝・小穴等で、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石製品・金属製品が出土した。確認された旧地形は、南北に緩やかに傾斜し、標高は南端で約32.5m、北端で約31mを測る。

古代では、竪穴建物を中心とした集落の展開が確認された。竪穴建物 (SI) は9棟確認され、内1棟 (SI1) は7世紀前半にあたる他は、主に奈良・平安時代に比定されるものである。竪穴建物は平面プランが方形で、辺3～9m程度を測るが、辺9mを測る大型の1棟 (SI7) 以外は、辺5m以下の中型・辺3m以下の小型タイプが主体的である。主柱穴は不明なものが多いが、小型のものは無柱ないし壁際によるものと推定される。主軸は北東－南西向を主とし、カマド跡は5棟において検出された。但し、明瞭に残存していたものではなく、焼土痕跡が検出されたもので、位置は壁隅の南東 (2棟)、南西、南、北東においてであった。また、これら竪穴建物域の南端には幅約6mを測る河道が検出され、これ以南は遺構・遺物ともに希薄になる状況を呈する。

また、竪穴建物を切る状況で、ほぼ南北に走る溝 (SD) を検出している。この溝はSD7・8・11としたもので、SD7・8はほぼ平行することから両側側溝形態とみなすことができ、また竪穴建物 (SI3) を切る東西に連続する小溝 (SD13・15) をいわゆる波板状凹凸面としてみなすならば、これらは道状遺構として捉えられると思われる。SD7・8の心の間距離は約2m、路面幅は約1m程度を測ることから、機能的には集落道でも小枝道的なものと想定される。

以降、中世では、総柱による掘立柱建物が数棟確認される。調査区幅の限定から全容は掴めないが、柱間は1.5～2m程度を測る。また、土坑は3基検出しているが、その内のSK4は径約4.5m、検出面からの深さ約0.3mを測り、平面プランは楕円形状を呈するもので、珠洲焼甕や青磁等と共に微量の骨片が出土しており、土坑墓の可能性も考えられ注目される。

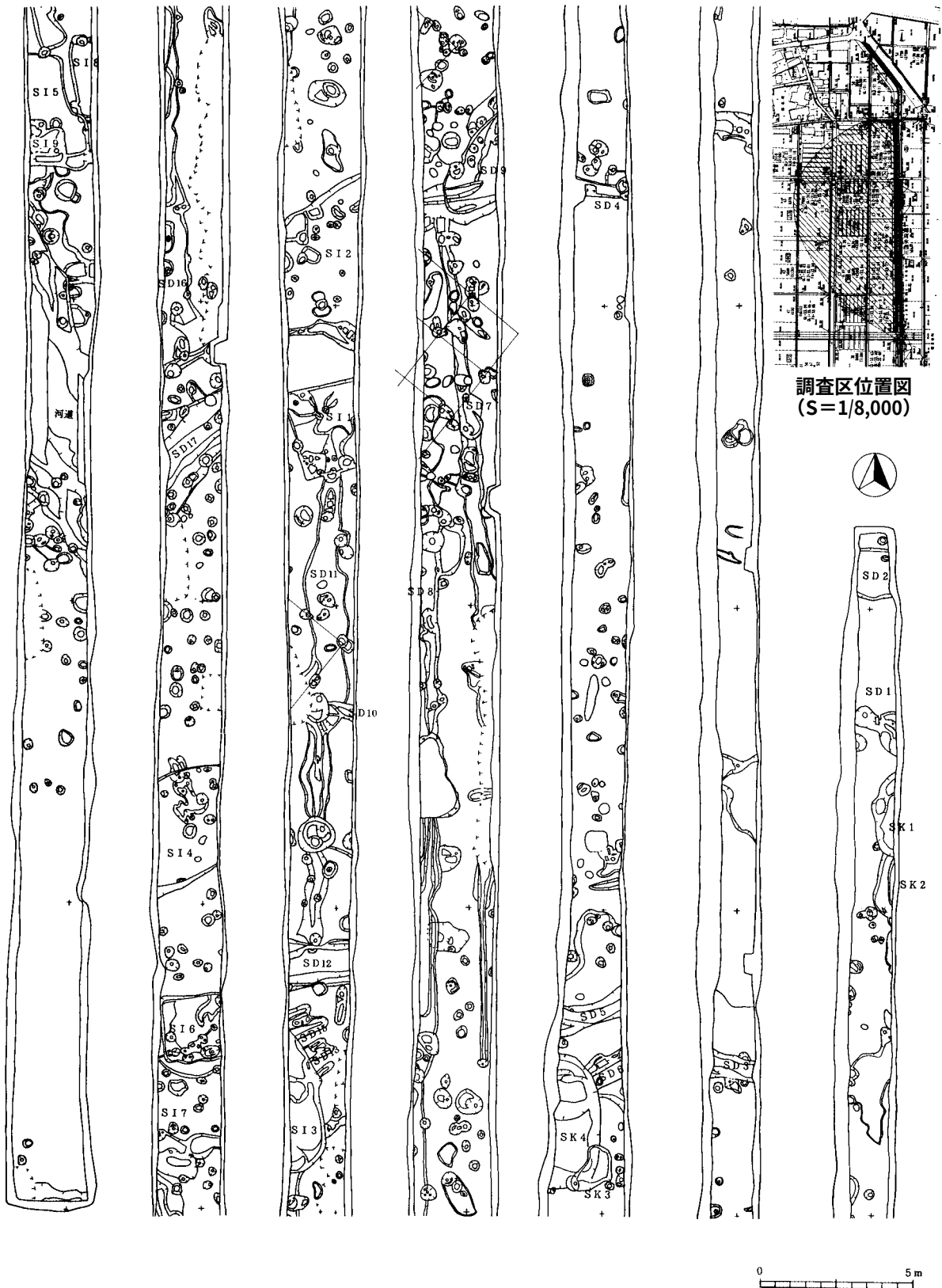
(土屋)



竪穴建物 (SI1) 完掘状況



竪穴建物 (SI6～9) 完掘状況



遺構図 (S=1/200)

一針B・C遺跡

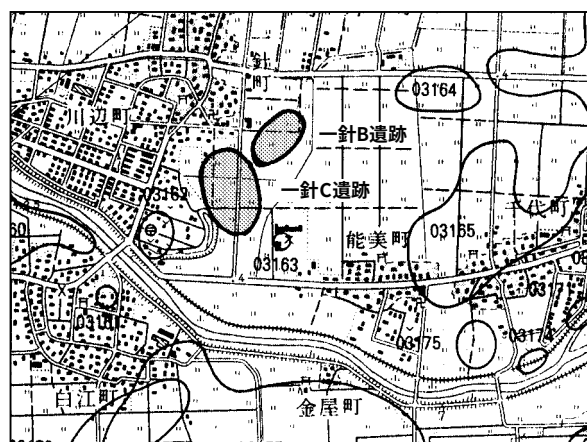
所在地 小松市一針町地内

調査期間 平成12年4月28日～平成12年9月25日

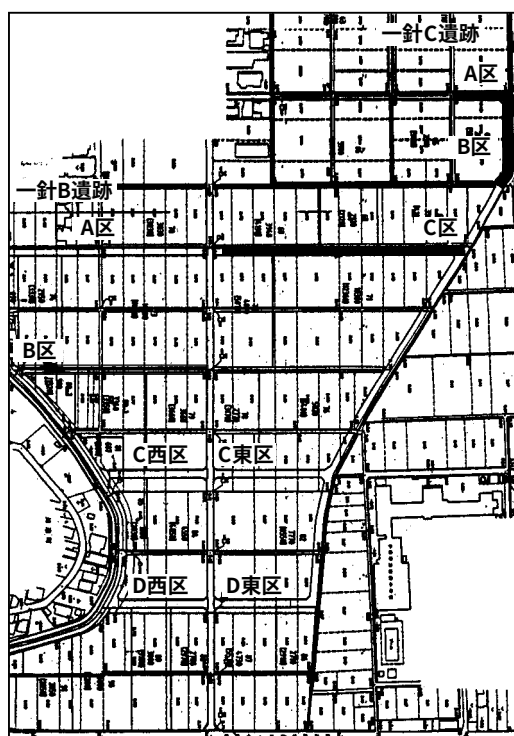
調査面積 1,700㎡

調査担当 久田正弘 荒木麻理子 谷内明央

一針B・C遺跡は小松市一針町に所在し、地形的には梯川中流域右岸の微高地に位置するが、現在では平坦な水田地帯となっている。一針B遺跡は弥生時代中期末から古墳時代前期、一針C遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする集落遺跡である。周辺には千代・能美遺跡、白江梯川遺跡、漆町遺跡、佐々木ノテウラ遺跡など弥生時代後期～古墳時代前期にかけての集落遺跡が数多く分布している。県営ほ場整備事業に伴う調査であり、幅2m程度のトレンチ調査である。



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区区割図 (S=1/6,000)

1. 一針B遺跡

本遺跡は3ヶ所の調査区に分かれ、北からA区・B区・C区と呼称した。

A区では掘立柱建物1棟や溝、土坑が確認されたが、遺構密度はやや薄い。集落の中心はここよりも南西にあったと思われる。弥生時代中期末から古墳時代前期にかけての遺物が主として出土している。

B区は遺構密度が希薄で、溝、土坑、ピットがごく少数分布するのみである。南側は大正期の水路跡により攪乱を受けている。出土遺物も僅少で、弥生時代後期から古墳時代前期のものと、古代のものが若干出土している。

C区からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物が大量に出土した。2条の自然河道があり、その内側に、断面が逆台形をした深い溝で区画された居住域が分布する。居住域は掘立柱建物と周溝を持つ建物数棟のほか、数多くの土坑や溝、ピットからなる。

本調査区において特筆すべき遺構に竪穴式住居SI01がある。調査区の東側を流れる幅約30mの自然河道の近くに建てられており、住居から河道に向けて排水溝が掘られている。時期は弥生時代後期前半のもので、古墳時代前期の溝によって切られている。大きさ10.2×9.6mの楕円形で、地面を30cm

程度掘り込んで床面を作っている。住居のほぼ中央には、松菊里型ピットと呼ばれる灰穴炉が設けられており、炉の外側には4本、壁際に8本の柱穴が並んでいる。床面には住居の北東部と南西部に炭粉の集中が見られるほか、貼り床の痕跡が見られる。また、壁際に掘られた溝の付近から完形土器や石器などが多く出土し、それらとともに、管玉の未製品や玉砥石などの玉造関係遺物や、土製鋳型やとりべと見られる鉢形土器といった青銅器鑄造関連遺物が出土した。よって、SI01は管玉や青銅器を製作していた工房跡と思われる。なお、灰穴炉の中から焼けた粘土塊が多数出土した。銅を溶かすのに使われた炉の破片の可能性はある。

鋳型は完形品2点を含む計7点出土しており、その大きさや形から銅鑄製作とみられるもの（6点）と銅剣製作の可能性のあるもの（1点）とに分けられる。前者には割竹型と箱型があり、側面中央に把手ないくぼみをもつ。両者をあわせて使用したと考えられている。割竹型の鋳型の側面には、刻み目が入っていた。2つの鋳型を組み合わせるときに紐をかけるために使われたのであろうか。後者は破片のため、全体について把握できないが、断面が半円形であると思われる。内側には斜格子の刻み目が入れており、外側には突帯が剥がれた痕跡と沈線が見られる。

とりべとみられる鉢形土器は、碗形の底部に高台がついた形をしており、外側から穿孔された2つの穴がある。穴のある側は把手のついた側よりも高くなっている。内側に高熱を受けた形跡が見られないため、粘土を貼って使ったものと思われる。

なお、本調査区西端を流れる自然河道から古墳時代前期の輪の羽口が出土し、またSI01の灰穴炉下層では鉄滓が出土するなど鍛冶に関係する遺物が出土している。これらの遺物の存在から本遺跡では青銅器の生産のみならず鉄器の生産も行われていたと考えられる。

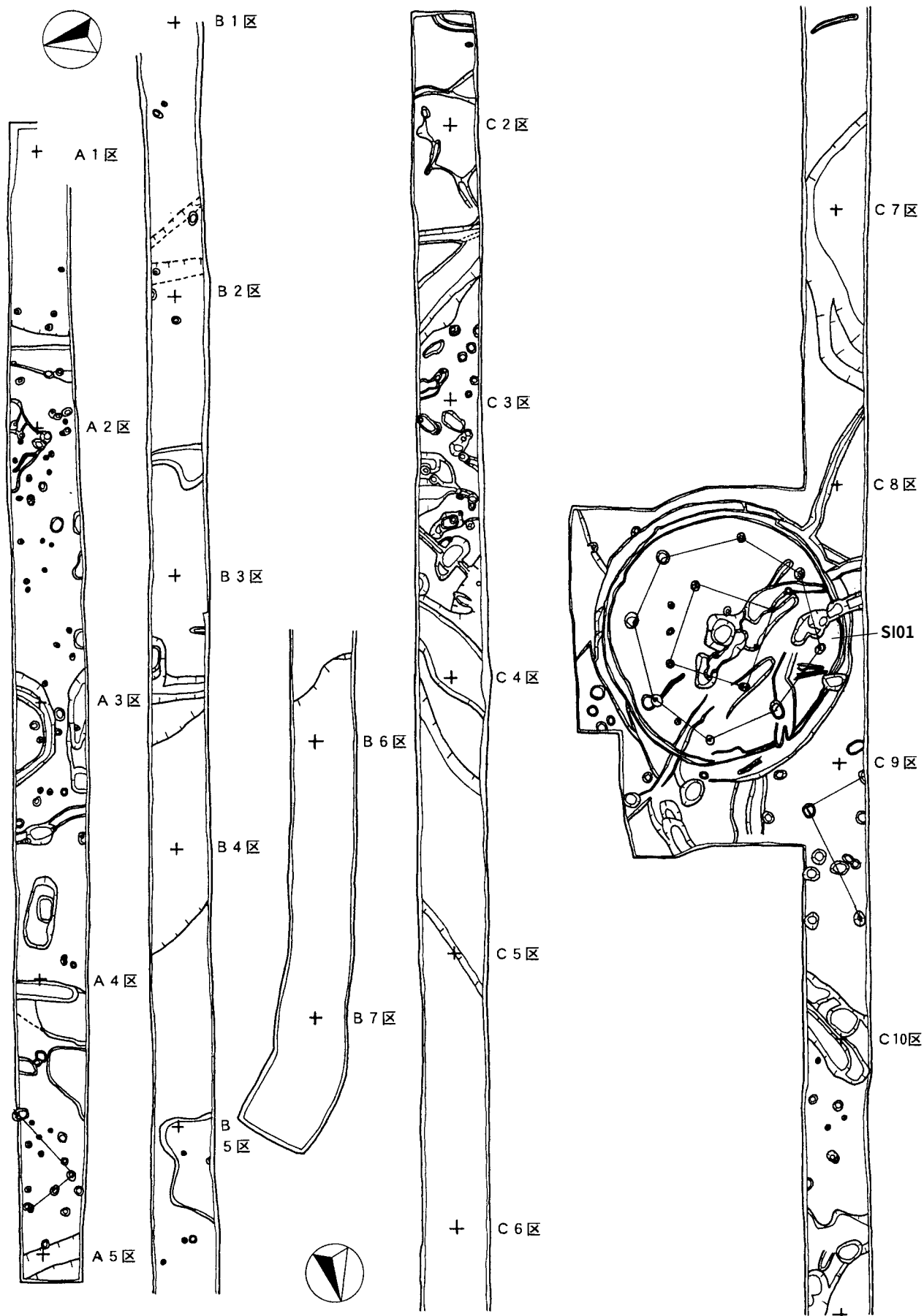
2. 一針C遺跡

本遺跡は6ヶ所の調査区で調査を行った。弥生時代後期から古墳時代前期を主とする集落跡であり、古代・中世の遺構・遺物が若干見られる。本遺跡も一針B遺跡と同じく、集落の中を数条の自然河道が流れており、それらが埋まった後、中世に再掘削して利用していたようである。集落の中心は本遺跡の南側にあると思われ、掘立柱建物数棟やピット、土坑、溝などの遺構を確認したが、総じて遺構密度はあまり高くない。なお、本遺跡の西側は旧梯川により攪乱を受けており、集落の範囲は定かではない。

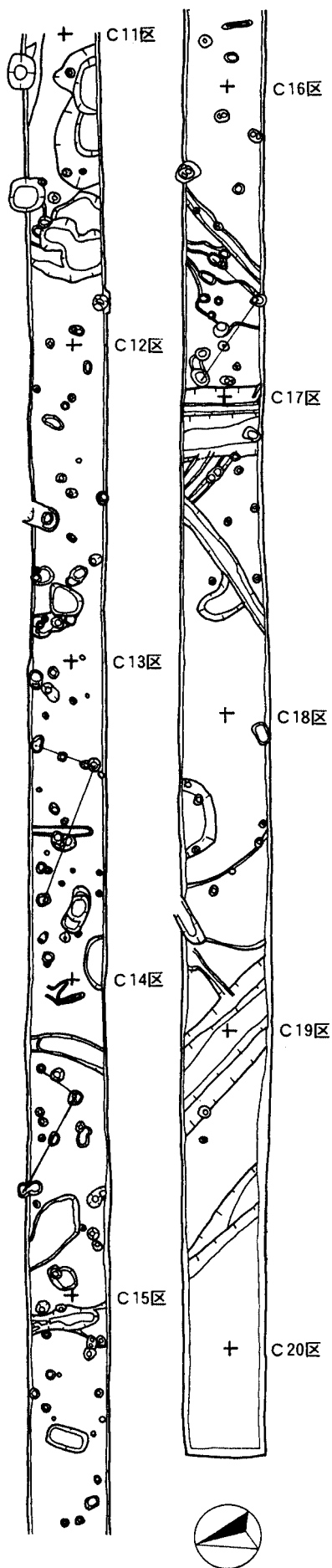
（荒木）



SI01 完掘状況（南西から）



一針B遺跡 平面図 (S=1/200)



とりべとみられる鉢型土器



割竹型の土製鑄型



箱型の土製鑄型



内面に斜格子目が刻まれた鑄型

そそり 直下遺跡

所在地 加賀市直下町地内

調査期間 平成11年6月16日～平成11年10月17日

調査面積 1600㎡

調査担当 松浦郁乃 菅野美香子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

遺跡が所在する直下町は、加賀市の中心部である大聖寺から約3km南東部に位置する。周辺の曾宇町・日谷町とを含めた地域は、三谷地区と呼ばれ、各々の町が3つの谷間に入り込むようにして、集落を営んでいる。調査区は曾宇町の集落が所在する谷から、前面に平野部が広がっていき、その基部に位置する。

調査では、弥生時代・古代・中世の3時期を確認し、中でも8世紀末から9世紀中葉にかけての古代の遺構・遺物がその中心となる。

調査区の中央から北西部にかけて、掘立柱建物群が確認された。現在のところ8棟確認しており、いずれも建物長軸を南北にもつものである。建物1・2を除く建物は3間×3間の側柱建物

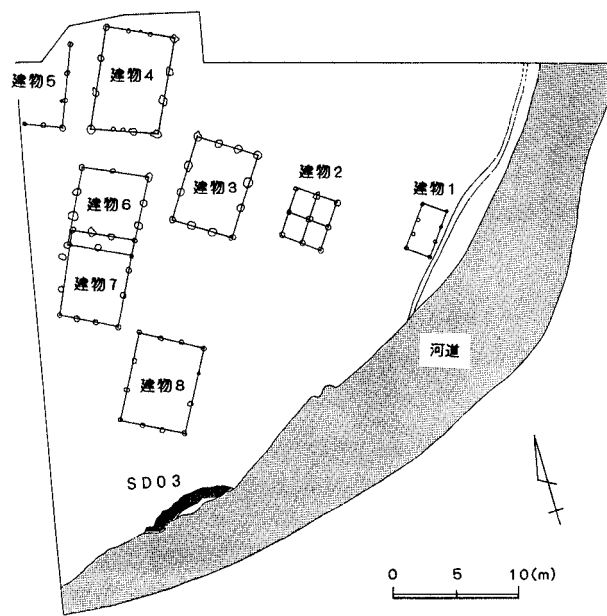
に限られており、それぞれの建物の床面積もほぼ同規模である。屋的な機能を持つ建物と想定される。建物2は2間×2間で、確認された建物群中唯一の総柱建物で、倉と想定され、この遺跡の住人が、多少とも動産所有の可能な階層であることを伺わせる。

調査区の南側から東側にかけては、山際を削るようにして流路をとる河道が確認された。検出面での幅約9m、深さ約1.2mを測り、腐食物と細砂が互層状にみられる上層と、握り拳大の礫が堆積している下層とに分れる。上層の段階では、川幅を狭めるためと思われる杭列がみられ、中世と思われる杓子や漆器、宋銭などが出土している。SD03はこの河道から一旦建物側に弧状に分岐し、再び河道に合流する。大量の桃核と、建物群と同時期の遺物が多く確認されており、転用硯や「仁」と書かれた墨書土器が出土している。

出土遺物は、近年までの耕作によって出来た攪乱からの出土が大半であった。内容としては須恵器が主体を占め、若干の土師器煮炊具がみられた。注目すべき物としては、土師器製の獣脚の存在があげられる。出土位置はそれぞれ異なるが、三脚とも確認でき、同一個体の物とみられる。いずれも脚部の長さ約10cm・径約5cmで、ヘラ状具により、粗く面取りがされる。おのおの単体で自立する。他遺跡の出土例を実測図で見た限りでは、小松市二ツ梨一貫山窯の土師器焼成坑から出土した獣足と同様の形態をしており、これは三足盤もしくは鉢の一部とみられている。当遺跡出土の脚部も同様の性格のものと考えられる。この脚部が、完形の三足盤もしくは鉢として当遺跡で使用・廃棄された物か、それとも何らかのシンボリックな物として脚部のみが持ち込まただけかについては、今後の検討課題といえよう。

その他の時代としては、弥生時代後期の遺物を含む土坑が1基 (SK02) 確認された。遺物もSK02からの出土以外は、ほとんど確認できなかった。また、中世についても、河道から遺物の出土があり、それらも生活に密着した物であるため、集落が存在した可能性が考えられる。しかし、今回の調査では建物跡など明確な遺構は確認できなかった。

(松浦)



遺構配置図 (S=1/600)



獣脚出土状況



航空写真

平成12（2000）年度上半期の遺物整理作業

企画部整理課

1班 金沢市梅田B遺跡（1996・1998年度調査）の出土遺物の整理作業として、土器570点の記名・分類・接合・実測・トレース及び石器5点、木器27点の他に、特記として大型木製品16点の実測・トレースを行った。土器は弥生時代後期前半と、古墳時代前期の甕・壺・高坏・器台などが大半を占め、他に古代の建物跡の地鎮祭祀に使われたと思われる土師器の椀・皿もみられた。石器では砥石、木器では中世の井戸の横棧・側板が主で、実際に板を組み合わせながら実測したのが印象的だった。（海野美香子）

2班 羽咋市四柳ミッコ遺跡（1997年度調査）の分類・接合および、実測・トレースを行った。

縄文時代晩期から中世にわたる土器や木器、石器、金属器の整理作業の中で、一際目を引いたのは、陶邑窯産の高坏である。ミッコ遺跡は幾度かの、洪水による影響を受けていたことが判っていたため、出土資料全般を隈無く点検すると同時に、陶邑に係わる参考資料を集めつつ、学びながら作業を進めていった。整理終了時には、古き物に触れ、新しき事を知る場であることを再認識した。（本保早苗）

3班 4月から5月にかけて、三つの遺跡の整理に携わった。まずは矢崎宮の下遺跡（1998年度調査）にはじまり、橋爪新A遺跡（1999年度調査）、指江B遺跡他（1999年度調査で、領家指江ハシバ遺跡を一部含む）、そして四つ目の甘田タイ遺跡（1999年度調査）で前半は終了した。四つの遺跡の中で最も整理期間の長かった指江B遺跡他では、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世の出土遺物が大量にあり、中でも墨書土器の多さには全く驚かされた。（本谷祥恵）

4班 先ず金沢城跡三の丸2次（1999年度調査）で瓦中心の実測・トレース。次に新丸2次（1998年度調査）で陶磁器の椀皿中心の実測・トレース。更に三の丸1次（1998年度調査）で陶磁器、瓦の実測・トレース、鉄砲所の跡ということで、めったにお目にかかれない鉄砲の様々な部品（雨覆、引き金、胴金、目当、火蓋、座金、ゼンマイ等）を実測・トレース。続いて本丸附段（1998年度調査）で灯明皿、火鉢、瓦等を実測・トレース。以上、前期は通して金沢城の整理を行った。（小屋玲子）

5班 鹿島郡田鶴浜町三引遺跡（1998・1999年度調査）縄文早期～前期初頭を中心とした土器、石器の分類・接合に6月から入った。4つの貝塚を含む資料は膨大、長い時を海中で過ごした土器の保存状態は良好で、当時のまま煤が付着しているものが多かった。厚い煤を取り除き文様が現れると縄文人の様々な個性が見えてくる。サルボウ・ハイガイ等の貝殻を用いた波状条痕が多く、主に植物を使用したと思われる刺突・爪型など、原体を探るのも楽しい作業である。（小林直子）

6班 前年度に行われた田鶴浜町三引C・D遺跡（1996～98年度調査）の分類・接合に引き続き、出土品の実測・トレースを行った。上層出土の遺物に関しては、遺存度は低いものの縄文時代後・晩期の土器が大半を占め、古墳～中世遺構面で多量の木製品が出土しており、その他数は少ないが、土偶・弥生土器・墨書土器・金属器・古銭を実測・トレースした。また、下層出土の遺物は、復元土器10点を含め、縄文時代前期初頭の土器を縄文の撚りや文様に苦心しつつ実測した。（新谷由子）

7班 珠洲市南黒丸遺跡（1998年度調査）の実測・トレースの後、小松市ブッシュウジヤマ古墳群（1999年度調査）の記名・分類・接合・実測・トレースを行った。中でも前者は中世の集落遺跡で、珠洲焼が遺物の大半を占め、甕・壺・片口鉢の三点セットを主に、燭台、水瓶、経筒、硯、分銅等も見られ、さらに窯跡の遺物のように歪み、使用痕の残る物が含まれていた事に強い関心を覚えた。又、中世の平瓦・丸瓦、輸入陶磁器等財力を窺える遺物にも触れ、興味深い遺跡だった。（馬場正子）

8班 金沢市戸水B遺跡（1998年度調査）の記名・分類・接合、そして土器を中心として、木器・

石器の実測・トレースを行った。遺物は弥生中期後半にあたる、戸水B式土器が殆どを占め、法仏式、布留甕も若干みられた。木器では、鳥形木製品や刳物容器の底板が紡錘車に転用されているものなどがあり、これらも全て戸水B式期のものであった。今回の整理作業に携わり、台付鉢や畿内系模倣高坏など、初めて目にする土器が幾つかあり、学ぶことが多い遺跡であった。（北 香織）

復元班 南黒丸遺跡、他に十数ほどの遺跡で、それぞれ個性のある土器など、連日にらめっこしている。梅雨が終わる頃、富来町高田遺跡から出土した、初めて見る古墳時代の置かまど（竈）で戸惑い、所長さんに色々と指導を頂き、無事に修復が済んで展示されることになった。残暑の季節が近づくと、金沢城跡から、重圧感が出てきそうな大甕が目の前に現れ、もしかして「・・・・？」と思いつつ、重労働と覚悟を決めて、その後初秋を迎えている。（小間博文）

洗浄班 春のスタート時は班員が5人だったが、夏には10人もの手で仕事をした。梅田B遺跡から始まり、畝田寺中遺跡、荻島遺跡、指江B遺跡、徳丸遺跡、近岡遺跡の6遺跡の洗浄をした。箱数にすると約670箱、強制乾燥室はいつも“満員御礼”状態だった。又、遺物のなかには墨書土器も数多く含まれ、細やかに且つ慎重丁寧な取り扱いに留意してきている。墨書のなかにははっきりと読めるものもあったが、あまりの達筆や細かく割れていて判読できない方が多かった。今でも墨書土器を扱う時は目を凝らして、どんな文字なのかドキドキしながら洗浄している。（末富しげ子）

平成12年度上半期の出土品整理作業

遺跡名	担当者	4月	5月	6月	7月	8月	9月
八幡遺跡	浜崎						
梅田B遺跡	宮川・松浦・柿田						
四柳ミツコ遺跡	土屋						
指江他	大西						
橋爪新A遺跡	大西	-					
矢崎宮の下遺跡	立原						
甘田タイ遺跡	久田						
金沢城跡三1	熊谷						
金沢城跡三2	滝川						
金沢城跡新2	滝川						
金沢城跡本丸附段	滝川						
永町83	湯尻						
永町88	湯尻						
三浦遺跡	三谷						
三引遺跡	金山						
三引遺跡	安中・湊屋						
近岡遺跡	菅野・土屋						
南黒丸他1	松山・林・和田・浜崎						
ブッショウ山古墳群	垣内・菅野						
八日市地方遺跡	浜崎						
戸水B（西部）	久田						



羽咋市四柳白山下遺跡出土の古代銭貨

加藤 克郎

1 はじめに

平成13年（2001）1月13日（土）—15年振りと報道された大雪が降り始めた日—羽咋市大町ゴンジョガリ遺跡の発掘調査事務所において、地元向けの現地説明会が催された。今年度で国道159号線鹿島バイパス改築工事に伴う発掘調査がほぼ終了することから、羽咋市四柳町・大町地内でのこれまでの発掘調査による成果を披露するという主旨であった。筆者は平成10年度の四柳白山下遺跡第5次調査の担当であったため、特に関心を持ちその説明会に出向いた。展示してある様々な遺物を観察していると、それらの中に四柳白山下遺跡から出土した「和同開珎」「隆平永寶」があることに気づいた。和同開珎については年報等で既に公表されているが⁽¹⁾、隆平永寶については公表されていなかったもので全く存外であった。そこで本稿では、これまでの発掘調査による様々な成果の内、特に出土した日本の古代銭貨について紹介しようと思う⁽²⁾。なお、鹿島バイパス改築工事に係わる本遺跡の遺物は現在整理中であり、また発掘調査報告書は未刊であるので、拙稿については本報告の段階で内容に変更が生ずる可能性があることをお断りする。

2 四柳白山下遺跡について

四柳白山下遺跡は羽咋市四柳町地内に所在する。県中央部の北寄り、能登半島の基部西側に位置し、北西部の眉丈山地と南東部の石動山系の碁石ヶ峰山地に挟まれた邑知地溝帯の南東寄りに立地する。本遺跡の西方には邑知瀧が広がり、昭和27（1952）年着工の国営干拓事業開始前は、当地から1.5km付近にまで迫っていた⁽³⁾。また能登国府（現七尾市）へ向かう古代の北陸道支路も、邑知瀧南東側を経由していたと推定され⁽⁴⁾、本遺跡周辺は水陸交通の要衝であったと考えられる。

石動山系の山容は、富山県氷見市側は比較的なだらかな傾斜を持つのに対して、七尾市・鹿島町・羽咋市側は傾斜が急である。山中には多数の断層が見られ、県内有数の地滑り地帯である。本遺跡は、この石動山系の碁石ヶ峰山地を開析して邑知瀧へ流れる、複数の小河川が形成した扇状地扇端部上に、北東から南西方向へ展開している。

さて今回紹介する古代銭貨は都合3枚で、平成6（1994）年度の第1次調査において、A・B地区下層遺構（7世紀末～9世紀）から出土した和同開珎銅銭が1枚、平成8（1996）年度の第3次調査において、F地区Ⅲ面（平安時代中期）から出土した隆平永寶が1枚、そして平成9（1997）年度G地区0・I面（平安時代末期～近世）から出土した隆平永寶が1枚である。

3 和同開珎・隆平永寶について

和同開珎という銭貨は平城京へ遷都される2年前、まだ藤原京に都が置かれていた元明天皇の治世に発行された貨幣であり、銀銭と銅銭とがある。『続日本紀』によると、和銅元年（708）正月に武蔵国秩父郡から「和銅」が献上され、2月に催鑄銭司を設置、5月に銀銭が、8月には銅銭が発行されたと記されている。これは7世紀末以来の「銀の流通」を「銅銭の流通」へと変化させるための措置で

銭名	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量
和同開珎(1次調査)	24.8	20.5	8	6.4	1.4	0.7	1.7
隆平永寶(3次調査)	24.9	21	8.1	7.2	1.4	0.6	1.4
隆平永寶(4次調査)	25.3	21	8	6.6	1.4	0.5	2.2

表1 銭貨計測表（単位 ミリメートル，グラム）



古代銭貨出土遺跡位置図（S=1/200,000）

あり⁽⁵⁾、翌年8月には銀銭の廃止が布告されている。更に和銅3年(710)改めて和同銀銭の使用が禁ぜられ、銭貨は銅銭に一本化された。この和同開珎銅銭は、天平宝字4年(760)、藤原仲麻呂政権下の萬年通寶鑄造開始までの52年間、鑄造されたものと考えられる。

一方、隆平永寶は平安京に遷都されてから最初に発行された銅銭である。桓武天皇の延暦15年(796)11月8日に鑄造に関する詔が發布されている。その中で「頃者、私鑄滋起、奸鑄紛然。施之交関、既為輕賤。宛之貯蓄不堪實用。」と記され、貨幣改鑄の理由として、私鑄銭の増加とそれに伴う貨幣価値の下落(物価騰貴の防止)を挙げている。また、このほかに都城造営経費の支払い手段という目的も持っていたと考えられている⁽⁶⁾。この隆平永寶は、嵯峨天皇弘仁9年(818)の富壽神寶鑄造開始までの22年間、鑄造されたものと推定されている。

4 四柳白山下遺跡出土の古代銭貨

ア A・B地区下層出土の和同開珎

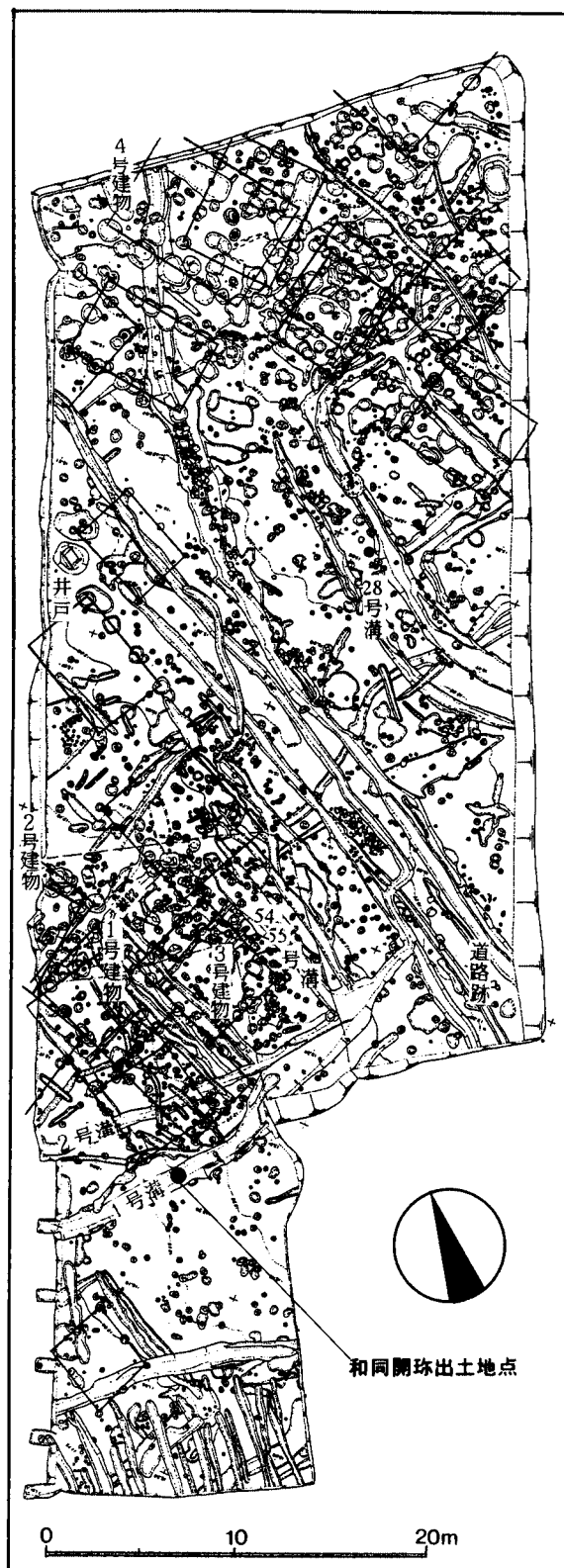
(奈良時代～平安時代前期の集落域)



和銅開珎

まず第1次調査の和同開珎が出土した遺構周辺の概略について記す。A・B地区下層(古代)では集落域が展開することが確認され、南側のE地区は耕作地であることから、当地区は本遺跡の集落域の南限に当たる。南北に通ずる古代の道路跡(集落内の生活道路と推定)があり、その東西には掘立柱建物群を検出している。西側建物群周辺からは漆塗壺や短頸壺、多量の墨書土器が周辺から多く出土している。道路跡より西側を西方に向かって流れる1号溝からは和同開珎銅銭及び帯金具が、4号溝からは木沓が出土している。これらの豊富な出土遺物の他に、付近から「寺」と書かれた墨書土器も出土していることから、調査区に隣接した箇所での寺関連遺構の存在が推測され、また周辺に地域の有力者の居住施設が所在することが想定される。

さて和同開珎が出土した1号溝は幅約40cm・深さ20～30cmの規模で検出されている。この1号溝は南側の耕作地と北側に展開する集落域とを区画する溝であると考えられる。和同開珎は溝底から約15cm上の堆積土層中から出土している。この出土した和同開珎は拓



AB地区下層遺構平面図
(S=1/400)

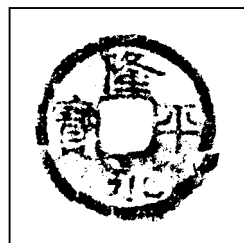
本に見られる通り、鋳上がりが良好で、破損も摩滅もない状況である。「開」字は門構えの2画目の右上及び5画目と6画目の間に隙間が生じたもので（隸書風の破字体）、古銭収集家の称する「隸開」に分類されるものである。

本出土事例のように、一定の地域を区画すると考えられる溝から古代銭貨が出土する県内の例として、発掘調査報告書が刊行されているものに限り挙げると、加賀市松山C遺跡（官衙）では、集落東端を区画すると考えられる溝SD02（9世紀後半～10世紀後半）の最下層から和同開珎銅銭が1枚出土しており、銭貨の他には、「米」と記された墨書土器、緑釉陶器、刀、大量の桃の種、箸状木製品、曲物底板などが出土している⁽⁷⁾。金沢市上荒屋遺跡（荘園）では、建物群の南辺を限る大溝SD40（8～9世紀）から和同開珎銅銭3枚、神功開寶3枚が出土しており⁽⁸⁾、その他、「東庄」と記された墨書土器、多量の土師器碗、緑釉陶器、瓦塔、木製の斎串、人形・馬形等の形代、素文鏡などが出土している。羽咋郡富来町田中遺跡（集落）では、集落の西側を限ると考えられるB調査区1号溝（8世紀前半～9世紀前半）から和同開珎銅銭が1枚出土しており⁽⁹⁾、この他、1号溝からは土器の他に斎串・下駄・木槌・曲物底板などが出土している。四柳白山下遺跡では、銭貨とともに「祭祀」を窺わせる遺物については出土していない。しかし以上3遺跡の事例は、溝からの銭貨出土の意味を考える上で、非常に興味深い。

さて能登国での和同開珎銅銭（銀銭は出土していない）は、6遺跡から合わせて23枚が出土している⁽¹⁰⁾。四柳白山下遺跡以外では①羽咋郡押水町北川尻ホシバ山遺跡（竪穴住居／2枚）、②羽咋市吉崎・次場遺跡（遺物包含層／1枚）、③羽咋市寺家遺跡（竪穴式建物／12枚）、④七尾市能登国分寺跡（塔心礎付近／6枚）、⑤羽咋郡富来町田中遺跡（大溝／1枚）からそれぞれ出土している。

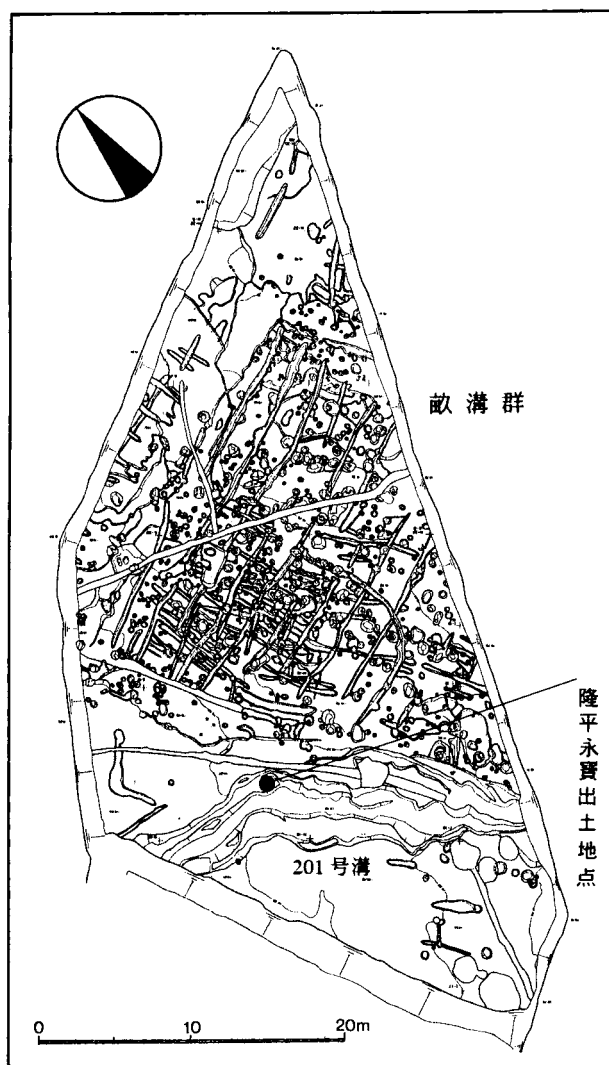
イ F地区Ⅲ面出土の隆平永寶 （平安時代中期の集落・耕作地）

第3次調査のF地区Ⅲ面では調査区の南寄り、幅2.5～4.5m、深さ約1mの規模の自然流路（201号溝／隆平永寶が出土）が確認されている。



隆平永寶

この大溝を境として南側は概して遺構密度は低い。一方大溝の北側は比較的遺構密度は高く、掘立柱建物の柱穴・炉跡等の集落に伴うものや（平安時代中期に廃絶）、集落廃絶後に営まれた耕作地の畝溝跡が検出され、集落跡からは帯金具・施釉陶器・土製供膳具・フイゴ羽口が出土している。201号溝の埋没時期については、その出土遺物の年代観から8世紀末～9世紀末以降で、上層

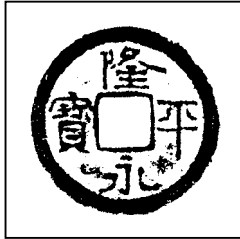


F地区Ⅲ面 遺構平面図（S=1/500）

(0・I面／中世の集落)形成以前であると考えられる。

さて件の隆平永寶は鑄上がりの状態は良好で、表面上は摩滅も見られないが、内部は腐蝕が進行している。そのため現在は大きく3つに割れてしまっている(現在保存処理を進めている)。この隆平永寶の埋没時期については調査では判明しなかったが、初鑄年である西暦796年以降で、大溝の埋没以前であることは明確である。このような自然流路と考えられる大溝から古代銭貨が出土する事例は、県内では小松市松梨遺跡が挙げられ、4号溝(8世紀後葉～9世紀中葉)から神功開寶が1枚出土している⁽¹¹⁾。

ウ G地区0・I面出土の隆平永寶(平安時代末期～近世)

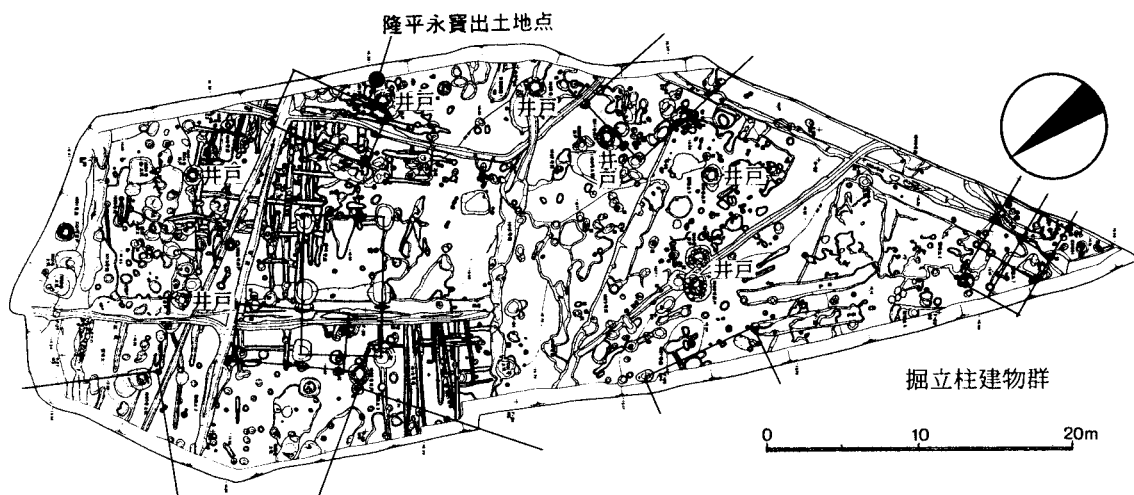


隆平永寶

第4次調査のG地区0・I面は、その主体となる時期は15～17世紀代であるが、12世紀から17世紀代の陶磁器・土師皿・銅銭・漆器などが出土している。遺構としては、掘立柱建物柱穴・井戸・土坑などが検出されている。さて隆平永寶は、調査区の中央寄りの東端の石組み井戸(SE1006)のすぐ東側の遺物包含層から出土している。

G地区出土の隆平永寶については、拓本に見られる通り、鑄上がりが良く、破損もなく、殆ど摩滅もしていない良好な状態であり、腐蝕の度合いは極めて低いといえる。しかし、若干ひしゃげている。このひしゃげた形態は、地中への埋没の際何らかの圧力がかかって変形したものではなく、鑄造された当初からのものであると理解されるものである。

隆平永寶が出土したのは以上述べた通り中世の遺構面からである。四柳白山下遺跡は前述したように土砂流地帯に立地する。そのため、遺構面が複数存在する。0・I面より古い時代の面であるⅢ-1面(平安時代前・中期の耕作地)との間には約30cmの厚さで土砂が堆積しているため、0・I面では古代の遺構は検出されない。ゆえにG地区出土の隆平永寶は中世の遺構に伴う遺物である。さて本銭は中世の模鑄銭の類ではない⁽¹²⁾。中世の遺跡から古代銭貨が出土するのは、一括埋蔵銭の中に数枚含まれるという事例が知られている。隆平永寶が出土する中世の遺跡も殆どが一括埋蔵銭遺跡であり、管見では全国で12遺跡(平成12年現在)確認できる⁽¹³⁾。本遺跡のように集落遺跡から出土するのは全国的にも余り知られていないが、福岡市博多区御供所町の中世港湾都市遺跡である博多遺跡群祇園調査区では、鎌倉～室町時代の溝(0区SD01/道路側溝・14世紀頃埋没)から隆平永寶が1枚出土している⁽¹⁴⁾。県内における一括埋蔵銭遺跡以外の中世遺跡からの出土例としては、羽咋郡志賀町坪野



G地区0・I面 遺構平面図 (S=1/500)

中世墳墓（13世紀中葉～14世紀）⁽¹⁵⁾において、11～12世紀代の中国からの14枚の渡来銭とともに隆平永寶が1枚出土しているという事例がある。この他に金沢市千木ヤシキダ遺跡では、SD150（中世の畝溝）から平安時代の土器と共に萬年通寶が1枚出土しているという事例がある。この千木ヤシキダ遺跡における萬年通寶を含む古代の遺物は、中世の遺構への紛れ込みと理解される⁽¹⁶⁾。

さて能登国での隆平永寶の出土している遺跡は上記の坪野中世墳墓の事例を含めて6遺跡35枚である⁽¹⁷⁾。今回紹介した四柳白山下遺跡（2枚）の他は、①羽咋市寺家遺跡（井戸・掘立柱建物／9枚）、②鹿島郡鹿西町金丸杉谷遺跡（壺に納入／11枚）、③鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡（壺に納入／11枚）、④羽咋郡富来町高田遺跡（遺物包含層／1枚）である。

5 おわりに

以上述べたとおり、四柳白山下遺跡出土の古代銭貨は、2例は古代の溝からの出土、1例は中世の遺構面からの出土であった。

第1次調査で和同開珎が出土した1号溝に関しては、斎串や形代など水辺の祭祀を行っていたと考えられる遺物は出土していない。しかし先述した、県内の他の遺跡において一定区域を画する溝で銭貨が出土した場合、共伴遺物から何らかの祭祀に関わるものであることが想起される事例がある。本遺跡での事例についてもそのような意味合いのものである可能性は否定できない。

第3次調査で確認された201号溝出土の隆平永寶については出土状況が明確でなく、共伴遺物も須恵器・土師器だけなので、その性格について明言することはできない。

第4次調査での隆平永寶については、中世の遺構面から出土したものであるが、これは先にも述べたとおり、古代の遺構からの紛れ込みではない。我が国の中世における貨幣は、唐宋明銭を主体とし、朝鮮・安南・琉球等の銭貨も含めたいわゆる渡来銭が流通していた。以上の他に渡来銭を模鑄した本邦模鑄銭や無文銭などの民間鑄造銭及び古代のいわゆる「皇朝銭」についても僅少ではあるが流通していた。こうした事実は中世の一括埋蔵銭に渡来銭と共に日本の古代銭貨が紛れ込んでいる事例があることから裏付けられる⁽¹⁸⁾。このような理由から本遺跡での事例は中世に流通していた古代銭貨の遺失物である可能性について指摘したい。

さて遺跡から出土した銭貨が「流通」によるものであるのか、「祭祀」によるものであるかは考古学的に証明することは非常に困難である。しかしその銭貨の使用形態が「流通」であれ、「祭祀」であれその両者を「普及」という側面で捉えれば、邑知地溝帯周辺は能登地方の中でも銭貨が「普及」していた地域であるといえるだろう。中央での銭貨の在り方を加賀・能登ではどのように受容していたのか、また他の諸国と比べてどのような差異があるのかについては、今後銭貨以外の遺物の検討も合わせて行い、その特質について考えなければならない。

さて今回紹介した第4次調査出土の隆平永寶については面白いエピソードがある。それはこの隆平永寶を坂井隆平さんという名前の作業員が掘り出し、自分と同名の銅銭が出土したことについて大変驚いたという出来事である。嘘のような本当のお話である。発掘調査時の一コマとしてここに付記する。筆を擱くに当たり、本稿執筆時にご助言を賜った安井重幸氏・芝田悟氏・川畑誠氏・湯川善一氏・菅野美香子氏を特に記し、感謝の意を表す。

注

- (1) 『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報6』1995年 (社) 石川県埋蔵文化財保存協会
- (2) 日本の古代銭貨については一般に「皇朝十二銭」や「皇朝銭」と称されているが、この用語は無文銀銭、富本銭、及び開基勝寶・大平元寶(銅銭である萬年通寶と共に鑄造された金銭・銀銭)については埒外である印象を与えるので、日本の古代銭貨一般を表す用語としては適切ではない。そこで本稿では皇朝十二銭・皇朝銭という用語は使用せず、敢えて使用する際には「」で括った。
- (3) 明治43年(1910) 測量・大正元年(1912) 発行の大日本帝国陸地測量部「邑知瀧」5万分の1地形図による
- (4) 『能登街道Ⅰ』(歴史の道調査報告書第2集) 1995年 石川県教育委員会
小林健太郎 「能登国」『古代日本の交通路Ⅱ』(藤岡謙二郎編) 1978年 大明堂
- (5) 栄原永遠男 「和同開珎の流通」『日本古代銭貨流通史の研究』1993年 塙書房
- (6) 栄原永遠男 「律令国家と日本古代銭貨」『日本古代銭貨流通史の研究』1993年 塙書房
- (7) 『松山C遺跡』 2001年 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- (8) 『上荒屋遺跡』Ⅱ 1993年 金沢市教育委員会
- (9) 『田中遺跡』 1988年 富来町教育委員会
- (10) ①『押水町史』 1974年 押水町役場
②『吉崎・次場遺跡(資料編2)』 1988年 石川県立埋蔵文化財センター
③『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』 1988年 石川県立埋蔵文化財センター
④『七尾市史』資料編4 1970年 七尾市役所
⑤『田中遺跡』 1988年 富来町教育委員会
上記の他にも和同開珎が出土した事例はあるが、正式な報告がなされていないので、割愛した。
- (11) 『松梨遺跡』 1994年 小松市教育委員会
- (12) この隆平永寶が模鑄銭ではない理由としては、銭文が鮮明で、鑄縮みによる小型化も見られないからである。また古代銭貨で中世に模鑄されているものは、奈良時代に発行された和同開珎・萬年通寶・神功開寶だけであり、今のところ隆平永寶の模鑄銭については確認されていない(日本銀行調査局編『図録日本の貨幣1-原始・古代・中世-』1972年)。石川県内で日本古代銭貨の模鑄銭として知られているのは、管見では1例だけで、それは神功開寶の模鑄銭(いわゆるシマ銭)である。この事例は昭和36年(1961)11月鹿島郡鹿島町武部において発見された一括埋蔵銭(約11,000枚)の中に神功開寶が1枚含まれていると芝田悟氏により報告されたものであるが(「能登鹿島町武部の出土銭貨に関する予察」『石川考古学研究会々誌』第33号平成2年3月)、後に芝田氏自らこの事例が模鑄銭(シマ銭)であると訂正して発表したものである(「模鑄銭神功開寶について」『石川考古』第201号 平成2年10月)。
- (13) 大門出土銭(16c) 静岡県周智郡森町森
四ツ枝遺跡(15c) 静岡県小笠郡菊川町半済
田麦・江本家出土銭(中世) 長野県中野市田麦
牛沢出土銭(16c) 群馬県太田市牛沢町
長者原出土銭(14~16c?) 宮城県栗駒郡栗駒町姫松字泉沢
志海苔出土銭(14~15c) 北海道函館市志海苔町
伝・泉福寺遺跡(15c第3四半期) 新潟県南魚沼郡湯沢町湯沢字白石

下道遺跡（14c第2四半期）新潟県長岡市栖吉町字下道

大塚遺跡（中世）兵庫県三木市大塚

木梨遺跡（14c）広島県尾道市木之庄町

伊喜末堂の空遺跡（中世）香川県小豆郡土庄町伊喜末

若宮町一括埋納銭（室町時代以降）福岡県鞍手郡若宮町

以上は『畿内・七道からみた古代銭貨』（出土銭貨研究会第7回研究大会資料集成／2000年）収載の事例を拾い、可能な限り原典に当たった。

- (14) 『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ』 1988年 福岡市教育委員会

- (15) 芝田悟 「羽咋郡志賀町坪野中世墳墓の出土銭貨」『石川考古学研究会々誌』 41 1998年
石川考古学研究会

- (16) 『金沢市千木ヤシキダ遺跡』Ⅱ 1991年 金沢市教育委員会

- (17) ①『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』 1988年 石川県立埋蔵文化財センター

- ②浜岡賢太郎・吉岡康暢「隆平永寶を包蔵した土師質壺の例」『石川考古学研究会々誌』 9
1965年 石川考古学研究会

- ③清水宣英 「謎秘めた隆平永寶」『広報ろくせい』 246号 1981年10月 鹿西町役場

- ④『富来町史』資料編 1974年 富来町役場

なお②③については、耕地整理中に不時に発見されていること、小壺の中に隆平永寶が11枚納入されていたこと、3枚紛失して9枚現存していることなど出土状況が酷似していること、他、両遺跡の距離が約800mと近いことなどから両者を混同する報告も見られる。『石川県遺跡地図』（1992年発行）では金丸杉谷遺跡で隆平永寶が出土している旨については記載があるが、金丸宮地遺跡に関しては隆平永寶のことについては触れられていない。鹿西町教育委員会安井重幸氏のご教示によると、②③は全く別の出土事例で、前者出土の隆平永寶は現在個人蔵で、後者出土のものについては鹿西町指定文化財となっており、現在石川県立歴史博物館に寄託されているとのことである。筆者はどちらの遺品も実見していないため、両者について混同があるのか、全く別の事例であるのかについては明言できない。今後更に調査して改めて発表したい。

- (18) 文献史料でも日本古代銭貨が流通していたことが伺えるものがある。永正9年（1512）8月30日に室町幕府から東寺へ宛てられた文書である（岩波書店 1957年刊『中世法制史料集』2・385～389撰銭条々）。

定 撰銭事

一百文の内、口さしの分、ふるせに十文、洪武二文、宣徳二文、永楽六文已上廿文なり、一地せにの内、よき永楽五文、大観、嘉定以下うらに文字のあるせに、よき銭の内たるへし、一少分つゝもこれをおふて用へし、

一日本せに、われせにをのそく、但少かけたるハよき銭の内たるへし

第2項の「地せに」は模鑄銭のことであるので、第4項目の「日本せに」は模鑄銭を示すのではなくいわゆる「皇朝銭」のことである。この項には「精銭としては割れ銭を除くが、但し少し欠けているものは精銭の内とする」と記されているので、四柳白山下遺跡出土の隆平永寶は中世においては精銭として扱われていたものと考えられる。

石川県埋蔵文化財情報

第5号

発行日 2001(平成13)年3月30日

発行者 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本確文堂
